ARATAMASHASHUHEN-SITE

荒玉社周辺遺跡 II

―― 平成16年度店舗建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 ――

2005. 3

茅野市教育委員会

ARATAMASHASHUHEN-SITE

荒玉社周辺遺跡 II

―― 平成16年度店舗建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 ――

2005. 3

茅野市教育委員会

荒玉社周辺遺跡から諏訪上社前宮を望む

出土遺物（磁器）

序　　文

このたび、店舗建設の実施に伴い茅野市教育委員会が荒玉社周辺遺跡の発掘調査を行いました。

荒玉社周辺遺跡は諏訪神社上社の前宮の前方に位置し、遺跡名の由来となった荒玉社は、古文書により室町時代には既にあった神社であることが知られています。これによると、諏訪神社上社の神事の中で重要な位置を占める荒玉神事が行われていたことがわかります。

調査の結果、大量のカワラケと、２間×８間の長大な礎石建物址や池状の遺構が検出され、かなりの回数神事が行われていた場所であったことがわかりました。これにより、中世の荒玉社であった可能性が考えられます。また、平成13・14年度に区画整理事業に伴って周辺の調査を行っており、これらの成果と合わせると、中世の諏訪神社の信仰を考える上で非常に貴重な成果が得られたと思われます。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの関係諸機関、株式会社　ダイナムの皆様、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成17年3月

茅野市教育委員会

教育長　牛山　英彦

例　　言

1．本書は、株式会社　ダイナム　代表取締役　佐藤公平と茅野市長　矢崎和広との間で締結した「茅野市荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した上原城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は株式会社　ダイナムよりの委託金を得て、茅野市教育委員会が平成16年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第1節5として記載してある。

3．発掘調査は平成16年10月5日から平成17年1月27日まで、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成17年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。

4．発掘調査から本書作成までの担当者は柳川英司である。また、本書の執筆は柳川が行った。

5．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

6．土層に色調については『新版標準土色帳』の表示に基づいて示した。

7．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。

スクリーントーン

カワラケ溜り・炭化物集中範囲

貼り床

粘土

焼土址

略語

カワ … カワラケ溜り

貼　… 貼り床

焼　… 焼土址

土　… 土坑

目　　次

序文　　茅野市教育委員会教育長　牛山英彦
例言・凡例

第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1
　第１節　発掘調査の経過 …… 1
　　１．発掘調査の事務経過 …… 1
　　２．調査区の設定 …… 1
　　３．発掘調査の経過 …… 1
　　４．調査日誌（抄） …… 1
　　５．調査組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 3
　第１節　遺跡の概観 …… 3
　　１．遺跡の立地と地理的環境 …… 3
　　２．遺跡の研究史 …… 3
　　３．周辺の遺跡 …… 3
第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物 …… 9
　第１節 遺跡の層序 …… 9
　第２節　発掘された遺構 …… 13
　第３節　発掘された遺物 …… 26
第Ⅳ章　調査の成果と課題 …… 33
第Ⅴ章　結語 …… 37
写真図版
抄録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第1節　発掘調査の経過

1．発掘調査の事務経過

平成16年9月27日　「茅野市荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長　矢崎和広と株式会社　ダイナム代表取締役　佐藤公平との間で締結し、委託金10,900,000円で発掘調査を行うことになった。

平成17年3月15日　発掘対象面積が当初予定より縮小したため、事業費を5,780,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

2．調査区の設定

平成13年度に隣接地区の発掘調査を行ったところ、礎石建物址やカワラケ溜まりなどが検出され、大規模な祭祀遺跡であることがわかった。また、今回発掘調査時に事前に試掘調査を行い、遺構の検出される場所を中心に、事業地内の発掘調査範囲を確定した。平成13年度の調査区を1～4区とし、平成14年度の調査区を5区、平成15年度の立会調査を6区としたため、今回の調査区を7区とした。

グッリドについては調査範囲内に設定し、遺跡の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x=−1130.000・y=−32335.000を基準点とし、この基準点から一辺5mのグリッドを設定した。ベンチマークは776.208mである。

3．発掘調査の経過

表土剥ぎを10月5日から開始し、発掘調査を終了したのは12月22日、埋め戻し作業が終了したのは1月27日だった。遺構実測のための基準杭測量は株式会社　両角測量に委託し、10月21日に基準杭測量を行った。

12月20日には株式会社　東京航業研究所によって空中写真撮影を行った。当初、遺跡内には水が湧き出ており発掘調査には困難を極めた。11月下旬になると湧水量は減り、遺構が判明するようになった。

4．調査日誌（抄）

10月5日　現場開始。表土剥ぎの前に試掘トレンチを各所に入れる。

10月7日　昨日に続いて試掘調査を行う。これにより調査範囲を決定する。

10月21日　株式会社　両角測量により基準杭測量行う。

10月25日　作業員を入れ、発掘調査を始める。

10月26日　表土剥ぎ終了。

10月27日　遺構確認を行う。所々から焼土らしき跡を発見する。

10月29日　礎石建物址の礎石らしい石を検出する。遺物のドット図を取り始める。遺跡中央部に排水のための溝を掘り始める。

11月4日　遺跡南隅からカワラケ溜まりを検出。これをカワラケ溜まり1とする。また、1号土坑を検出。礎石建物址周辺の掃除をする。

11月5日　昨日の方形竪穴からビニール紐を検出したところから、平成12年に試掘したグリッドであることが判明。カワラケ溜まり1付近は上層から黄色い面が検出され、下層は炭が多い。下層へ行くに従っ

て遺物が大きくなる。

11月10日 遺跡の北西側からはほとんど遺物は検出されない。又、排水の溝を掘る。

11月22日 霜による壁面・土山の崩落やスロープの調整などの安全対策のために再び重機を入れる。

11月30日 安全対策のための重機は終了。礎石建物址周辺を掘り下げると新たな礎石が検出された。3面の文化層があることが考えられる。

12月 2日 カワラケ溜まり1から多くのカワラケが出土する。また、新たな礎石を発見する。

12月 6日 池状遺構をカワラケ溜まり21とする。また、新たな礎石が3つ見つかる。

12月 7日 カワラケ溜まり23の図面を取り始める。

12月 8日 カワラケ溜まり21・22の写真撮影を行う。カワラケ溜まり23の下からは更にカワラケが出土した。

12月 9日 また、新たに礎石が検出された。南西側をかなり下げたが、下層には生活面はないようだ。

12月10日 カワラケ溜まり23の実測。南西側から新たなカワラケ溜まりを検出。また、土間に粘土を貼っている場所を検出する。甲府市教育委員会の佐々木満氏来跡。

12月13日 集石1の実測を行う。新たに礎石が検出される。

12月15日 ベルト5のセクション図の実測。新たに礎石を検出する。

12月16日 池状遺構の掘り下げを行う。

12月17日 礎石建物址の断面図を作成。遺跡北西側半分の遺構確認。

12月20日 空中写真撮影をラジコンヘリコプターにより株式会社　東京航業研究所が行う。撮影終了後、遺跡内の石をすべて上げる。

12月21日 最後の確認で更に深く掘ると、礎石が新たに6基検出された。これにより、礎石建物址1は8間になる建物であることがわかった。

12月22日 現場の撤収作業を行い、発掘調査を終了する。

1月 7日 遺跡の埋め戻しを行う。(～27日)

5．調査組織

調査主体者　両角源美（教育長）（～平成16年9月30日）　牛山英彦（教育長）（平成16年10月1日～）

事務局　　宮坂耕一（教育部長）

文化財課　小平廣泰（課長）

文化財係　守矢昌文（係長）　小池岳史　百瀬一郎　柳川英司　大月三千代

調査担当者　柳川英司

発掘調査・整理作業員

清水里苗　田中洋二郎　東城深雪　野澤みさ子　原　徳治　北条嘉久男　柳沢　宏

発掘調査期間中と遺物整理期間中、株式会社ダイナムならびに地権者の方々にご助力をいただき調査を円滑に進めることができた。謝意を表し記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事上田典男氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

宮坂光昭　会田　進　小坂英文　山田武文　宮坂　清　田中慎太郎　高見俊樹　青木正洋　五味裕史

中島　透　小松隆史　小松有希子　河西克造　笹本正治　佐々木満　小林純子　小林光男

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概観

１．遺跡の立地と地理的環境

荒玉社周辺遺跡（319）は茅野市宮川安国寺2024番地他に所在する。この場所は茅野駅から約1.3kmに位置している。本遺跡は守屋山系より流れ出る水眼川や干沢川から押し出された土砂によって形成された扇状地であり、宮川によって運ばれた土砂によって形成された河原地の接点に位置する沖積地である。宮川は天井川であり、河床は遺跡より高い位置にあると思われる。

遺跡の南西側には中世に大祝諏方氏の居館であった前宮神殿があり、宮川を挟んで北側の永明寺山麓には上原城が見える。また、安国寺区内には、高遠からの経路である杖突峠から伸びる秋葉街道があり、歴史的にも重要な位置にある。

２．遺跡の研究史

本遺跡は、平成13・14年に発掘調査が行われた。道路部分の調査であったため遺構の全貌はわからなかったが、数多くの遺構と遺物が検出された。遺構は礎石建物址・掘立柱建物址・方形竪穴・溝址・井戸址・カワラケ溜まり・柱穴・集石・焼土址などが検出されている。遺物はカワラケや舶載磁器・瀬戸美濃系陶器・常滑焼甕・東濃系甕、柿経・人形・下駄などの木製品、銭や刀などの金属製品が出土している。

３．周辺の遺跡

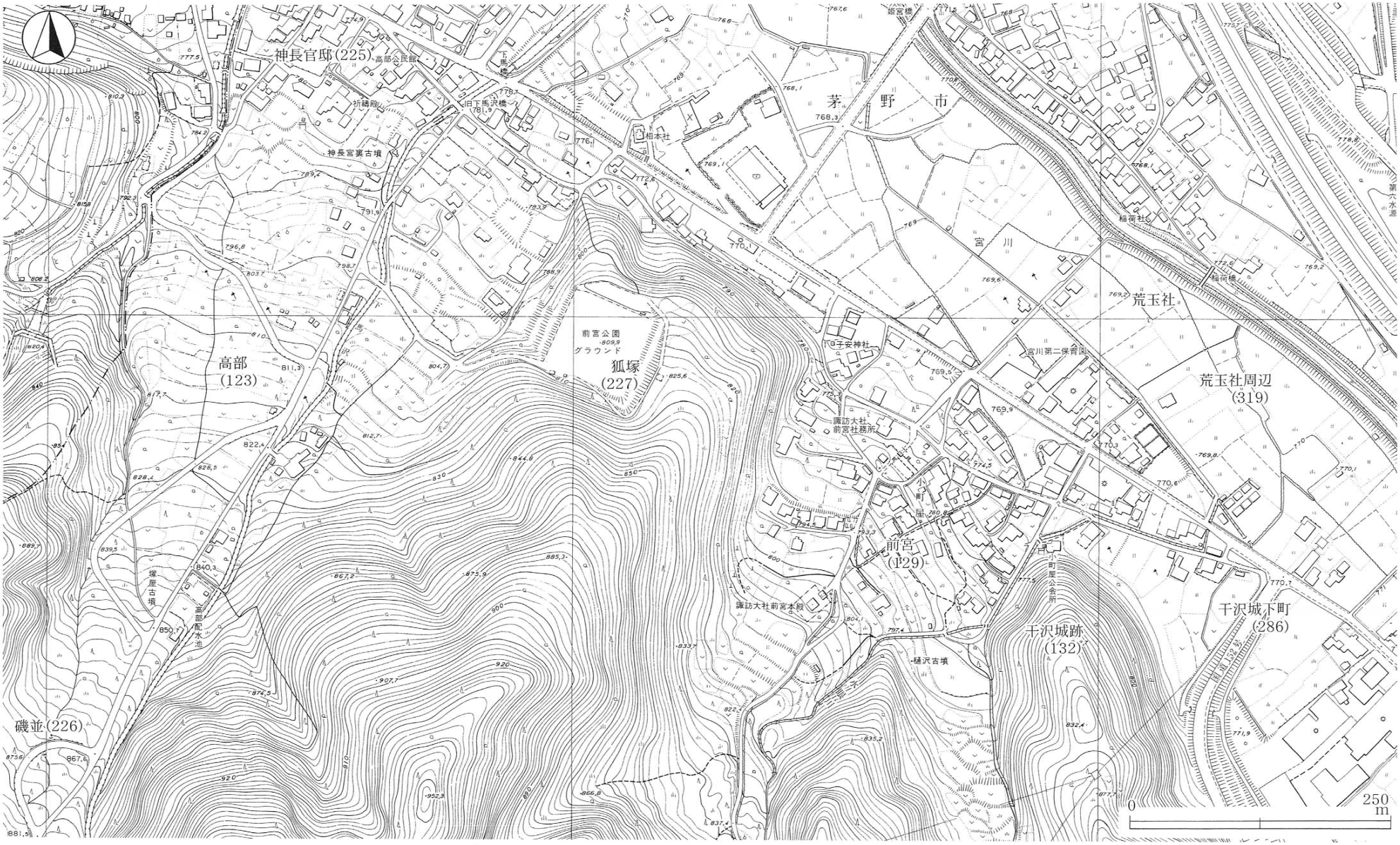
安国寺地区の遺跡は北西側に高部地区・南東側に西茅野・茅野地区と接している。これらの地区は、縄文時代より中世に至るまで非常に多くの遺跡が濃密に分布している。特に、安国寺小町屋地区には中世に諏訪上社の現人神だった大祝諏方氏の居館址である神殿や前宮などの宗教関連施設が数多くあったとの記録があり、非常に重要な中世の遺跡の分布地帯である。

高部遺跡（123）　昭和56年に静香苑進入道路建設に伴い発掘調査を行った。このとき発見された遺構は縄文時代中期の住居址10軒と屋外埋甕2・縄文時代後期の土壙・古墳時代の住居址2軒と土壙墓1・平安時代の住居址24軒が検出されている。平安時代は11世紀後半の柱状高台の土師器が出土しており、中世へと続く遺跡と考えられる。中世の遺物も平安時代末から鎌倉時代のものが出土している。平成8・9・10年度には市道改良に伴って発掘調査を行い、奈良時代の住居址2軒・平安時代の住居址2軒・古墳2基が検出されている。このときに鎌倉時代の遺物とともに、中世の比較的広い造成面が検出されており、屋敷跡の存在が想定される。

前宮遺跡（129）　前宮遺跡は諏訪神社上社の現人神であった諏方氏の居館のあった場所で、この地は「神原」や「神殿」と呼ばれていた。まとまった発掘調査はなされていないので詳細は不明である。

干沢城跡（132）　干沢城は守屋山麓から伸びる尾根状台地に形成された山城で、戦国時代までの大祝諏方氏の城であり、付近には諏訪氏の居館である「神殿」（現諏訪上社前宮）が位置する。文明15年の諏方氏一族の内訌（1483）や、天文11年（1542）の武田氏・高遠諏方氏との合戦で使用され、文献史料に残る重要な城郭として昭和63年に市史跡に指定された。発掘調査は昭和50年代と平成9年に二の郭に位置する鉄塔の建て替えに伴う発掘調査が行われた。二回目の発掘調査では、縄文前期末葉の遺跡を造成して郭を造っ

第１図　遺跡の位置（１/50,000）



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１/50,000）

ていることがわかり、地面を造成した版築の跡や方形竪穴・掘立柱建物址の柱穴らしき遺構を検出している。出土遺物は一回目は常滑甕破片やカワラケ、二回目はカワラケ・内耳土器・坩堝・瓦器・古瀬戸陶器・中国産磁器・常滑焼片・銭貨・銅製品・鉄角釘・茶臼・搗き石・火打ち石などが出土している。遺跡の時期は遺物から13世紀から15世紀であると考えられ、干沢城下町遺跡とほぼ同時期の遺跡である。

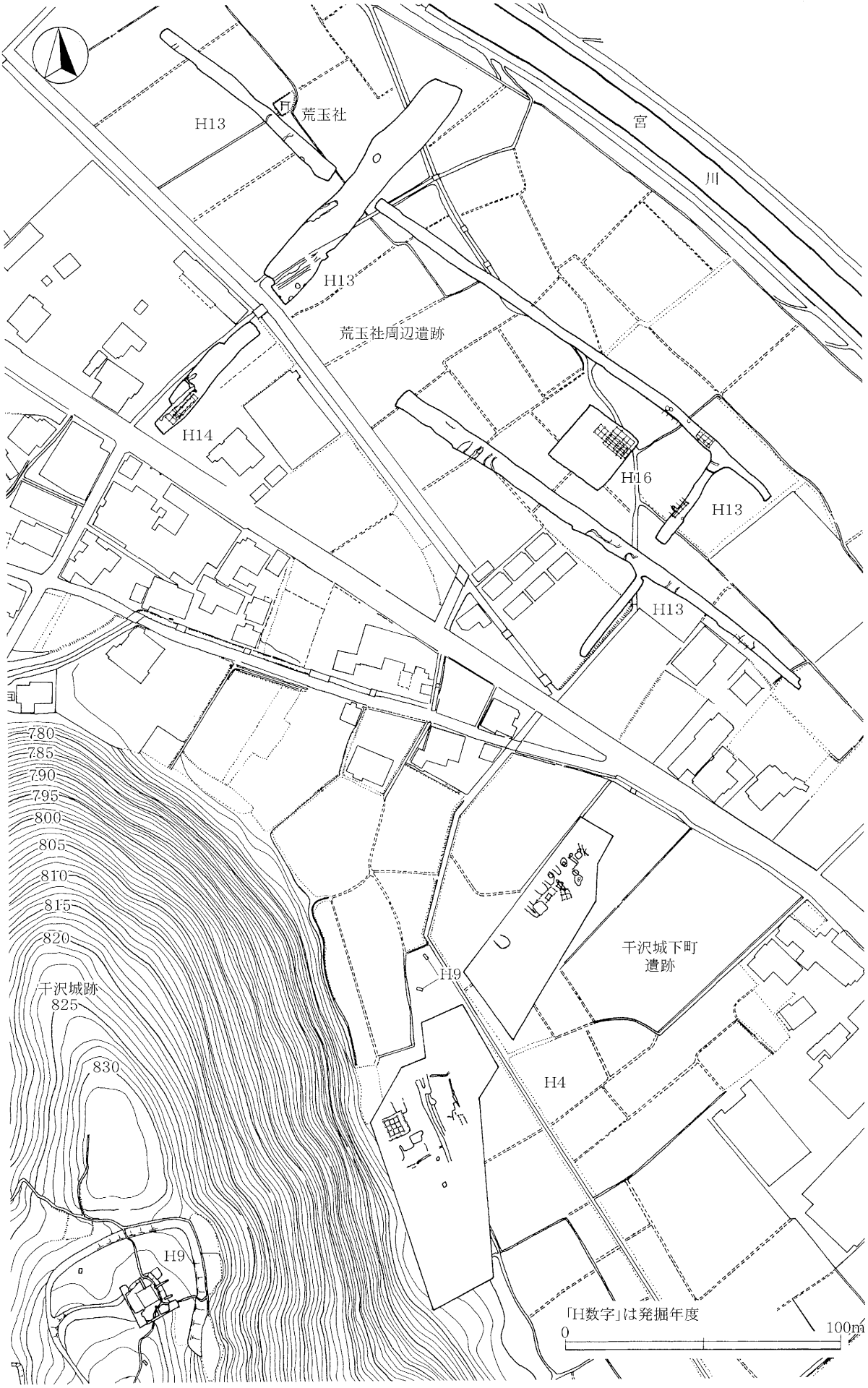
神長官邸遺跡（225）　神長官邸遺跡は守屋山麓の扇状地上に位置している。この地は中世以来、諏方上社の神官である「神長官」を勤めてきた守矢氏の居住している場所である。守矢家には鎌倉時代からの古文書を多数保有しており、中世の信濃を語る上で欠くことのできない史料として昭和41年に長野県宝に指定された。そしてこの中には荒玉社周辺遺跡の中世の状況を記した古文書がある。本遺跡は、平成2年に茅野市の施設として神長官守矢史料館が守矢家敷地内に建設されるのに伴い発掘調査を実施した。発掘の結果、遺構が二面にわたって検出され、建物基壇や礎石建物址が発掘されている。遺物もカワラケや瀬戸製陶器・輸入陶磁器が出土している。遺跡の時期は、出土遺物より14世紀から16世紀まで存続したと考えられる。

磯並遺跡（226）　静香苑進入道路第Ⅱ期工事に伴い昭和58年に発掘調査が行われた。基壇状遺構が2基検出され、基壇状遺構1をとりまくように一段低い位置に基壇状遺構2が階段状に造成されていた。基壇状遺構1からは礎石建物址が1軒と土坑1基・石組状遺構1・溝址2基・カワラケ溜まり1が検出された。カワラケ溜まりは礎石建物址1の前庭部にあり、基壇状遺構2に落ちる間際に形成されていた。基壇状遺構1と2の間の段差には、石垣や階段などを構成したと思われる石列が検出されており、人為的に段差がつけられていたことがわかる。基壇状遺構2からは集石1基・土坑2基・2条の石列が検出されている。石列は基壇状遺構の東側を区画するかたちで配置されている。本遺跡からは大量のカワラケが基壇状遺構1から集中的に出土している。この中に12世紀後半と考えられる擬似高台カワラケと13世紀前半から13世紀後半に使用されたと考えられる手捏ね成形のカワラケが出土している。磯並神社は諏訪上社の神事で重要な摂社の一つで、荒玉社は磯並神社と同格の神社であったことが守矢文書などの史料からわかる。諏訪上社大祝の諏方氏が大祝に就任するとき、室町後期に成立したと考えられる『大祝職位事書』によると、大祝が十三所参を行ったときに十三所として「磯並」と「荒玉」の二社が含まれている。神宮寺区所有の「諏訪大社上社古図（伝　天正の諏訪社絵図）」によると磯並社を取り巻くかたちで「瀬大明神」「玉尾明神」「穂股明神」があり、これらの社も十三所の中に含まれている。発掘地は磯並社以外にこれら三社の敷地も含まれている可能性もある。

狐塚遺跡（227）　昭和56年に前宮公園建設工事に伴い発掘調査が行われた。このときは、古墳2基・古墳時代の土坑1基・平安時代の墓壙3基が検出された。本遺跡は高部の扇状地と前宮の扇状地間に張り出している尾根上に位置し、この尾根を少し登ると諏訪上社の祭礼が行われた「峰の湛」のイヌザクラがあり、古来より祭祀の場であったことを伺わせる。古墳・平安時代と時代は隔絶しているが、墓域として使用されている場であり、諏訪神社との関連性が考えられる。

干沢城下町遺跡（286）　干沢城下町遺跡は、平成4年に国道256号線改良事業に伴う発掘調査が、平成9年には鉄塔建て替え工事に伴う発掘調査が行われた。本遺跡は現在の安国寺と前宮の中間に位置し、干沢城跡の下に広がる遺跡である。『守矢満實書留』などによると、本遺跡付近は「大町」の存在が想定される場所である。平成4年度の発掘調査では礎石建物址など特殊な遺構が検出されたことから、信濃国安国寺の一部ではないだろうかと想定している。遺構は多くの掘立柱建物址や礎石建物址・方形竪穴・井戸址・溝址などが検出されており、遺物もカワラケを中心とし、瀬戸製陶器・中国製陶磁器が数多く出土している。さらに湿地帯のため木製品も数多く検出され、漆椀・漆皿・漆鉢・曲物・箸・折敷・下駄・人形・柿経等が出

土している。遺物より遺跡の時期は13世紀中頃から15世紀末まで存続した遺跡と考えられる。平成8年度の調査では、4年の調査で検出された溝の延長が発掘されており、この中より木の破片や虫の死骸・土器・陶器片などが検出されている。千沢城下町遺跡は荒玉社周辺遺跡とは県道をはさんで隣接しているため同一の遺跡である。



第３図　荒玉社周辺遺跡の発掘状況（1/2,000）

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物

第１節　遺跡の層序

今回の調査区では、６ヶ所で遺跡の層序を観察した。今回調査を行った場所は、平成13年度以降、区画整理事業のため盛り土がされ１m以上埋められている。さらにその下には、近・現代の耕作面があり、中世の遺構まではかなりの深さである。

層序１（第４・18図・図版３－１）　層序１は調査区東隅で観察した。本遺跡は天井川の宮川より低位に位置し、さらに干沢川によって形成された扇状地の先端部にあたるため、湧水が豊富である。そのため、耕地にするにあたり排水を行わなければならず、近現代でも水路の開削が行われていた。図版３－１の写真を見ると、下部に木の杭が見えているが、これは近代に作られた水路の杭である。この水路は調査区の南西隅に区画整理事業が始まる前までには存在した。この水路の跡が４層から６層までの掘り込みである。その下に８層という非常に薄い層があり、カワラケなどを含む包含層がさらにその下の９層にある。８層は炭化物を多く含んでいる。それ以下の10層以下は砂礫が多くなる。12層は礫を含まない砂層となる。表土から中世の遺構面までの深さは180㎝である。

層序２（第４・18図・図版３－２）　層序２は調査区の南東側で観察を行った。７層以上が近世以降の土層と考えられる。８層は黄色の砂層で、平成13・14年度の調査でも確認されている層である。所々この層は見られない場所があるが、中世と近世を分けるキー層であると考えられる。この層から下の層が中世の層と考えられ、カワラケを多く含む遺物包含層となる。９～11層が遺物包含層である。礎石建物址との関係は、１号礎石建物址の礎石イ・チは11層から、２号礎石建物址の礎石ハ・ヨ・ノは９層以下である。つまり、遺跡の生活面は９層と11層の２面あることがわかる。12層は層序１の12層と同じく砂層である。表土から中世の遺構面までの深さは174㎝である。

層序３（第４・18図）　層序３は層序２の南西側にある。近辺にある遺構は１号土坑やカワラケ溜まり１がある。層序２と同じく９層は黄色の砂層である。10層は遺物包含層であると考えられるが、遺物は確認できなかった。明らかな包含層は11層以下である。１号土坑・カワラケ溜まり１とも11層とレベルが同じである。表土から中世の遺構面までの深さは186㎝である。

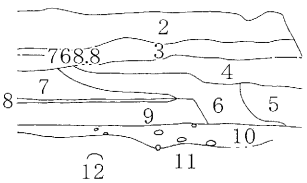
層序４（第４・18図・図版３－３）　調査区の南隅で観察を行った。第２層のような砂礫だけで構成される土層は、平成12年度の試掘調査や平成13年度の発掘調査でも確認されており、帯状になっている事がわかっている。この層はおそらく近・現代の土層と考えられるが、どのような要因によってこのような土層が形成されたのかは不明である。ここでも黄色の砂層が確認できる（７層）。遺物包含層は８層である。表土から中世の遺構面までの深さは192㎝である。

層序５（第４・18図）　層序４の北西側で、調査区の西隅で観察した。２層は層序４の２層と同じである。ここでは黄色い砂層は確認できず、遺物包含層は７層と思われるが、遺物の出土はきわめて少ない。この場所から北西側は、近・現代に作られた水路があり、遺構が切れている。

層序６（第４・18図・図版３－４）　調査区北西側で観察を行った。７層が黄色い砂層であるが、その下からは遺物包含層は発見されず、この辺りで遺構は切れていると考えられる。調査区の北西側の遺物の出土

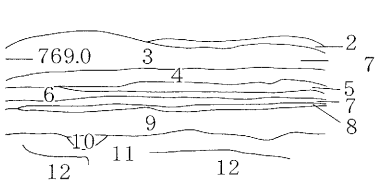
状態は稀薄である。

層序1



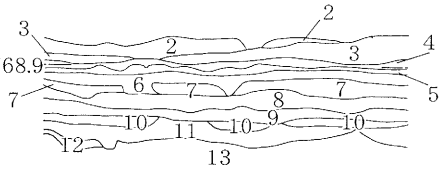
1 盛り土
2 7.5YR3/3　砂を多く含む
3 7.5YR2/2　粘性が高い
4 7.5YR3/2　砂層
5 7.5YR1.7/1
6 10YR2/2
7 10YR3/1　（白）泥層か
8 10YR1.7/1
9 7.5YR2/2
10 7.5YR3/2　砂礫を多く含む
11 7.5YR3/2　砂礫を多く含む
12 7.5YR3/1　砂層

層序2



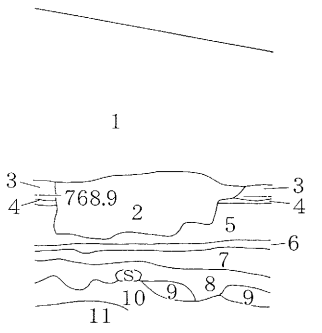
1 盛り土
2 7.5YR2/2　砂層
3 層序1－2
4 7.5YR2/2　（白）砂が筋状に入る
5 7.5YR1.7/1　砂が筋状に入る
6 7.5YR2/2
7 7.5YR1.7/1
8 7.5YR3/2　（黄）
9 7.5YR3/1
10 7.5YR3/1　砂を多く含む
11 7.5YR3/2　（赤）砂を含む
12 層序1－12

層序3



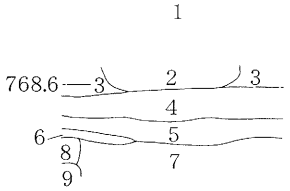
1 盛り土
2 層序2－2
3 層序2－3
4 7.5YR2/1　（灰）砂を含む
5 7.5YR1.7/1
6 7.5YR1.7/1
7 7.5YR1.7/1
8 7.5YR3/2　砂を含む
9 層序2－8
10 7.5YR3/2　砂を含む
11 層序2－11
12 7.5YR3/2　砂を含む
13 層序1－12

層序4



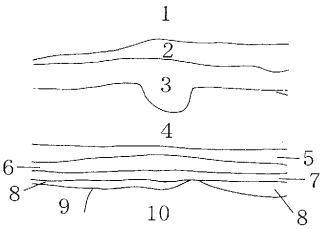
1 盛り土
2 砂
3 層序3－2
4 7.5YR1.7/1
5 7.5YR3/3
6 7.5R3/2　しまりかたい
7 層序2－8
8 7.5YR3/1　しまりゆるい
9 7.5YR3/1　小石を多く含む
10 層序1－11
11 層序1－12

層序5



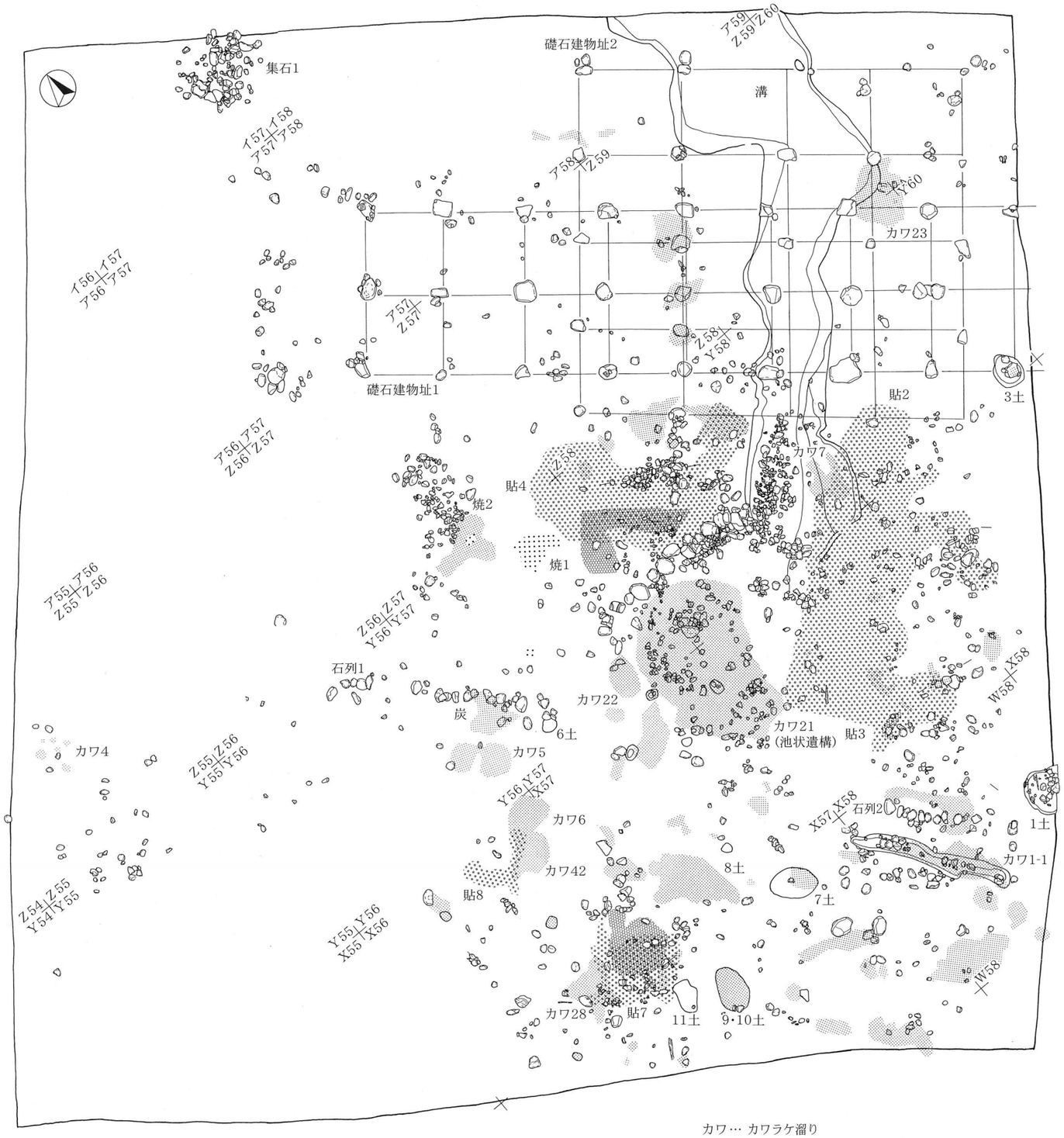
1 盛り土
2 層序4－2
3 層序1－2
4 7.5YR3/2　砂を含む
5 7.5YR3/1
6 7.5YR2/3　（灰）
7 7.5YR2/2　礫を含む
8 7.5YR2/2　礫を多く含む
9 7.5YR3/1　しまりゆるい

層序6



1 盛り土
2 層序1－2
3 層序2－3
4 7.5YR3/2
5 10YR2/3　（黄）砂層
6 7.5YR3/2　砂を含む
7 層序2－8
8 層序5－8
9 7.5YR2/2　礫を多く含む
10 層序1－11

第4図　遺跡の層序



カワ… カワラケ溜り
貼 … 貼　り　床
焼 … 焼　土　址
土 … 土　　坑

第５図　遺跡全体図　（1/120）

第２節　発掘された遺構

遺構は、礎石建物址２棟・石列２・溝址・池状遺構・土坑19基・カワラケ溜まり42・焼土址・集石２を検出した。

１．礎石建物址

礎石建物址は２棟検出されており、ともに長大な建物である。この２棟の新旧関係は切り合っているわけではないのでよくわからないが、１号礎石建物址が２号礎石建物址よりも低い位置にあるにも拘わらず、１号礎石建物址の礎石がすべて揃っているのに対し、２号礎石建物址の礎石が一部無いところから、２号礎石建物址が古く、１号礎石建物址が新しい遺構であると考えられる。

１号礎石建物址（第５・６・７・13・18図・図版３－５～８・４－１～５）　調査区北東部のグリッドＹ58・59・60・Ｚ57・58・59・ア57・58に位置する。遺構の重複関係は、２号礎石建物址と溝址、カワラケ溜まり13・23と重複している。礎石ムの上にカワラケ溜まり13がある。カワラケ溜まり13からは炭化物と粉々になったカワラケが一緒に検出されている。程度の差があるが、大体の礎石の周辺からは炭化物とカワラケが出土することが多い。２号礎石建物址との関係は、前述の通り１号礎石建物址の方が新しい遺構であると考えられる。

礎石ヤは３号土坑とした遺構であるが、中から礎石ヤになる平石やその上部から炭化材を検出している(第６図)。当初３号土坑と認められたように、穴を円形に掘り、その中に礎石を置く場合があったことがわかる。３号土坑の土層は次の通りである。

１層　7.5 YR 3/2　炭化物を含む。礫を多く含む。　　２層　炭化材、木柱か。

３層　10 YR 3/2　炭化物を多く含む。　　４層　10 YR 3/2　炭化物と砂を含む。

５層　10 YR 3/2

礎石がほぼ等間隔で並ぶ２間×８間の長大な建物であり、南東側が調査区外になっていてよくわからないが、調査区外にもまだ続くと思われる。軸線方向はＮ－49°－Ｗである。礎石はすべて上面が平になっている。チとヤの間の礎石が一つないが、これは構造上ないのか、それとも無くなってしまったのかは不明である。また、礎石ネは石が一つではなく、長方形の平石の上にさらに石を二つ乗せるという他では見られない形となっている。礎石ヤ・フ・カ・シ・ミ・ヱの周辺には、20㎝大～10㎝大の石がある。礎石の間隔は礎石の中心から中心で計測すると、最も離れているので礎石キ－シ間196㎝、最も狭いので礎石ナ－ケ間の172㎝、平均183㎝である。北西－南東方向の軸線で考えると、ミ－ヱ間186㎝、ヱ－セ間176㎝で、ヱ－セ間が10㎝も狭くなっている。

礎石の大きさは、最も大きいので礎石ケの71㎝×58㎝、小さいので礎石モの26㎝×24㎝、平均42.1㎝×33.2㎝でかなりバラつきがある。

礎石のレベルは北西側と南東側では異なり、北西側は高く南東側は低い。礎石チとカの差は30㎝である。これは、南西側の地盤が砂礫を多く含む層で堅緻であるのに対し、北東側が軟弱な泥状の地盤であることにより、礎石が沈んだか、当初より地形に合わせて礎石を配置したことによるものであると考えられる。柱の高さを合わせるためか、礎石エとミの上には板材が乗せられている。

２号礎石建物址（第５・６・８・14・18図・図版３－５～８・図版４－１・６）　調査区北東部のグリッドＹ58・59・60・Ｚ58・59・60・ア59に位置する。遺構の重複関係は１号礎石建物址、溝址・カ

ワラケ溜まり12・14・15・16・23と重複する。1号礎石建物址との関係は、前述の通り2号礎石建物址の方が古い遺構であると考えられる。カワラケ溜まり12・14は礎石ソ・オの上部にあり、多量の炭化物とカワラケの混じる土が礎石の上に乗っている。礎石サの周辺にはカワラケ溜まり15・16があり、礎石上部には木柱と思われる炭化材が確認できた。

礎石は東側に近・現代に作られた水路があるため、一部動いた物があると考えられる。おそらくB・C地点周辺の石や礎石キは動いた礎石であろう。

建物址の規模は4間×4間が確認されているが、北東・北西側の調査区外にもあると考えられるため、かなり大きな建物であることが考えられる。軸線方向はN－48°－Wで、1号礎石建物址とほぼ同じである。礎石の間隔であるが、北西－南東方向が最も狭いところで礎石タ－レ間の192㎝、最も広いところで礎石ホ－ヘ間の248㎝、平均220㎝である。北東－南西方向では、最も狭いところで礎石ハ－ヨ・オ－ケ・ロ－ト・ト－ツ・ク－ア間で188㎝、最も広いところで礎石ヨ－ノ・ホ－レ間で200㎝、平均192㎝で、北東－南東方向より北西－南東方向が狭いことがわかる。また、それぞれの方向でも礎石の間隔が異なり、北西－南東方向ではA－B間210㎝・B－C間196㎝・C－礎石イ間234㎝・礎石イ－ロ間228㎝、北東－南西方向ではA－礎石ハ間196㎝・礎石ハ－ヨ間192㎝、礎石ヨ－ノ間202㎝、礎石ノ－キ間194㎝で、間隔が広かったり狭かったりしている。全体的に見ると、1号礎石建物址よりも礎石間の間隔は広いようである。

礎石の大きさは、最も大きいので礎石ヨの44㎝×28㎝、小さいので礎石ハの20㎝×16㎝、平均32.4㎝×23.6㎝で、1号礎石建物址ほどではないがバラつきが見られる。

礎石のレベルは、1号礎石建物址と同様に北西側と南東側では異なり、北西側は高くその差は30㎝である。

2．溝址・池状遺構（第5・6・8・9・12・18図・図版4－7・5－2～8・図版6－1・2）

溝址と池状遺構は一体の遺構と考えられるため、ここで一緒に述べることにした。遺構の重複関係は、1・2号礎石建物址、カワラケ溜まり7・貼り床2・3がある。2棟の礎石建物址との新旧関係であるが、溝内の礎石が無くなっていないところを見ると2号礎石建物址よりも古い遺構であることが考えられる。溝は北東側から南西側に伸びており、途中から石列3が西側に伸びている。石列3から南側にはカワラケ溜まり21と22がある。ベルト1と2の土層を見ると（第9図）、ベルト1の11層から北西側、ベルト2の21層から北側が溝址・池状遺構と考えられる。ベルト1の7・14・18にはカワラケを多く含み9層は炭化物層である。ベルト2の26・28・31はカワラケを大量に含み28層は炭化物層である。ベルト2－23層は砂層であり、水の流れがあった可能性を伺わせる。

当初、図版6－1・2を見てわかるように、溝の部分だけ土の色が異なっていたため溝址と判明したが、石列3があるため、途中から溝のプランがわからなくなった。その後、石列3が溝址と関連する遺構と考えられ、池状の遺構の護岸的に用いられた遺構ではないかと想定された。

溝の規模は、最も幅の広い場所で352㎝、狭いところで144㎝、深さは10㎝で非常に浅い。断面形状は箱形と考えられるが、上面プランは真っ直ぐではなく、かなり不整形で蛇行している。特に北東側で形状がかなり崩れている。池状遺構としたところでプランはわからなくなっている。

石列3は40㎝～50㎝の大きな石を基礎となる石とし、その間に細かい石を積めていく構築物で、溝に入る辺りで細かい石となっている。池状遺構内は一部に集石が見られるが、かなり散発的に石が出土している感じである。石列3の平面形がやや湾曲している様子から、池状遺構の護岸的な遺構と考えられる。

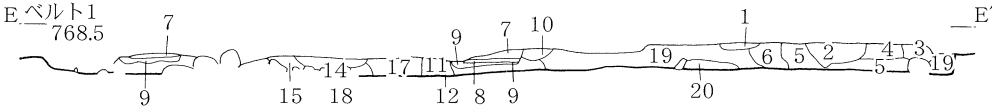
溝址の南側には一部粘土を用いた貼り床2・3・10があり、溝址と池状遺構の一部を埋め立てて貼り床

第6図　遺構配置図（1）　（1/60）

第7図　遺構配置図（2）　（1/60）

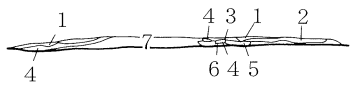
第8図　遺構配置図（3）　（1/60）

E ベルト1 768.5 E′



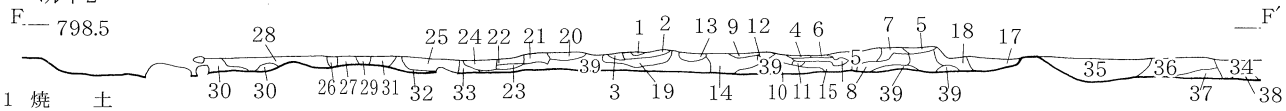
1 7.5YR3/1 黄色粒子を含む貼り床
2 7.5YR3/1 黄色粒子・炭化物を含む
3 7.5YR3/2 黄色粒子・炭化物を含む
4 7.5YR3/2 黄色粒子・炭化物を含む
5 7.5YR2/2 黄色粒子・炭化物を含む
6 7.5YR3/2 炭化物を多く含む、しまりややゆるい
7 7.5YR2/1 炭化物を多く含む、しまりややゆるい
8 7.5YR3/3
9 炭化物層
10 7.5YR3/2 炭化物と黄色粒子を含む
11 7.5YR3/2 炭化物と鉄分を含む
12 7.5YR3/2
13 7.5YR3/2
14 7.5YR3/1 炭化物を含む、しまり弱い
15 7.5YR2/2 炭化物を多く含む
16 7.5YR3/2
17 7.5YR2/1
18 7.5YR3/1
19 7.5YR3/2
20 7.5YR3/2 しまりかたい

H H′



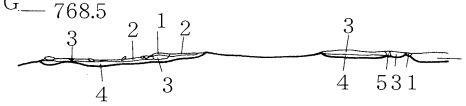
1 7.5YR2/2 炭化物とカワラケを含む
2 7.5YR4/3 (黄灰)貼り
3 7.5YR2/2 粘土を含む
4 7.5YR1.7/1 炭化物層
5 7.5YR2/2 炭化物を含む
6 7.5YR2/2
7 7.5YR3/2 砂を含む

ベルト2
F 798.5 F′



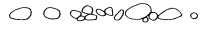
1 焼　土
2 7.5YR1.7/1 しまりとても堅い
3 7.5YR3/2 炭化物を含む
4 7.5YR2/2
5 10YR3/2
6 炭化物層
7 7.5YR3/2 とても堅い粘土を含む
8 7.5YR5/6 貼り床、粘土
9 7.5YR3/1 礫を多く含む
10 7.5YR2/2 しまり堅い 粘土を含む
11 7.5YR1.7/1 炭化物 炭化材を多く含む
12 7.5YR4/4 粘土 炭化材を含む
13 7.5YR3/3 砂を含む とても堅い
14 7.5YR4/2 粘土を多く含む
15 7.5YR3/2 粘土と礫を多く含む
16 7.5YR3/2 粘土を含む
17 7.5YR3/2 炭化物 砂を含む
18 7.5YR3/2 砂を含む
19 7.5YR4/3 粘土
20 7.5YR1.7/1 焼土粒子を含む しまり堅い
21 7.5YR3/1 炭化物を含む
22 7.5YR3/2 粘土粒子・石を含む
23 7.5YR4/4 しまり堅い
24 7.5YR3/1 砂を多く含む
25 7.5YR2/1 炭化物 小石を含む
26 10YR1.7/1 (漆黒)炭化物層 カワラケを多く含む
27 7.5YR3/2 炭化物を多く含む
28 7.5YR2/2 炭化物とカワラケを多く含む
29 7.5YR3/2 砂層
30 7.5YR3/1 カワラケと礫を含む
31 7.5YR3/1 カワラケと炭化物を多く含む
32 7.5YR3/1
33 7.5YR3/2 粘土・炭化物を含む
34 7.5YR2/3 砂と石を多く含む
35 7.5YR3/2
36 7.5YR2/2
37 7.5YR3/2 砂を含む
38 7.5YR3/2 砂礫層
39 7.5YR3/1 砂層

焼土址1・2
G 768.5 G′

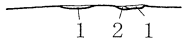


1 7.5YR1.7/1 しまり弱い
2 7.5YR3/1 炭化物
3 焼　土
4 炭化物層
5 7.5YR2/2
6 7.5YR3/2 炭化

集石2
J 768.5 J′



貼り床10－2
I 768.5 I′

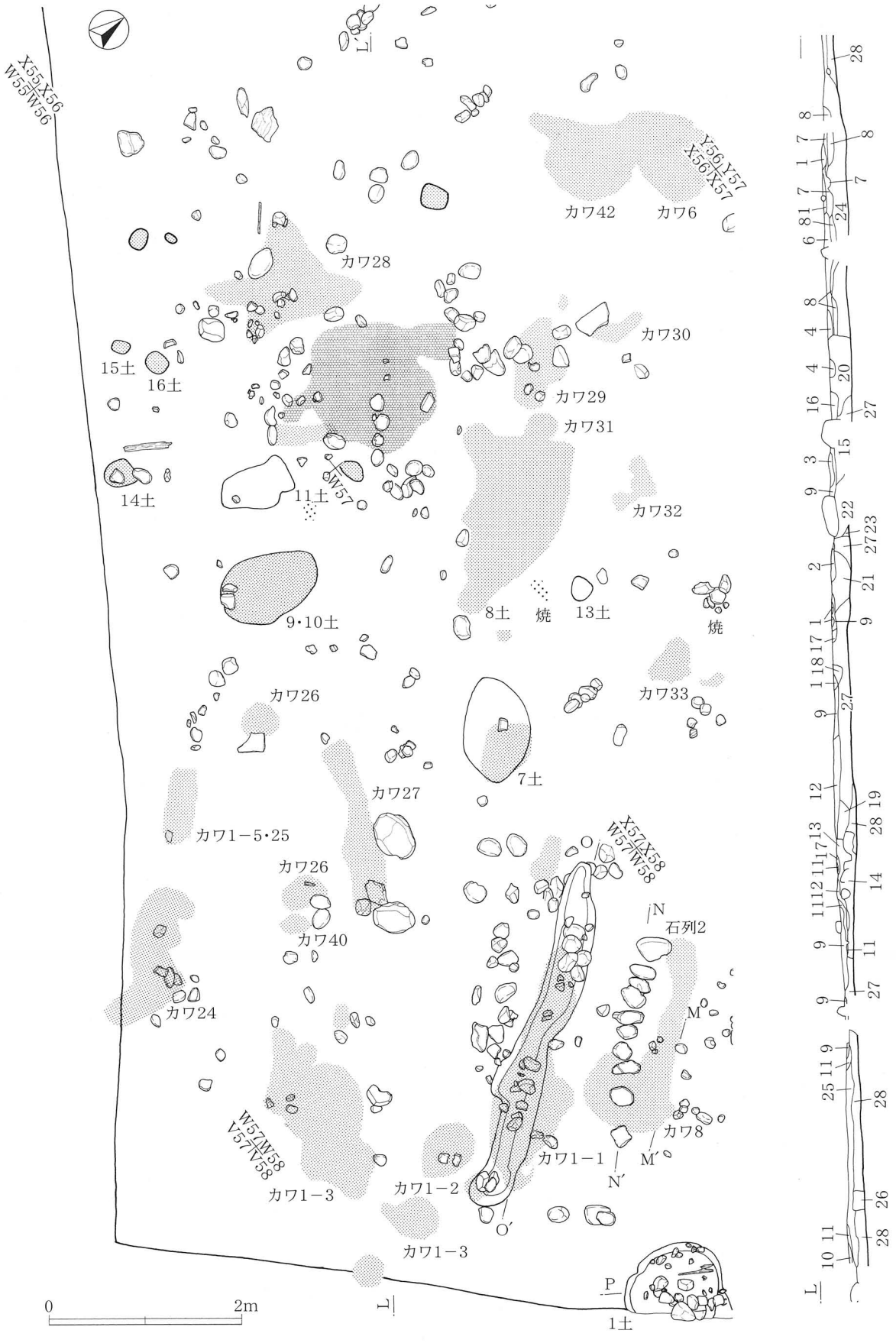


1 7.5YR1.7/1 炭化物 焼土ブロックを含む
2 焼　土 カワラケを含む

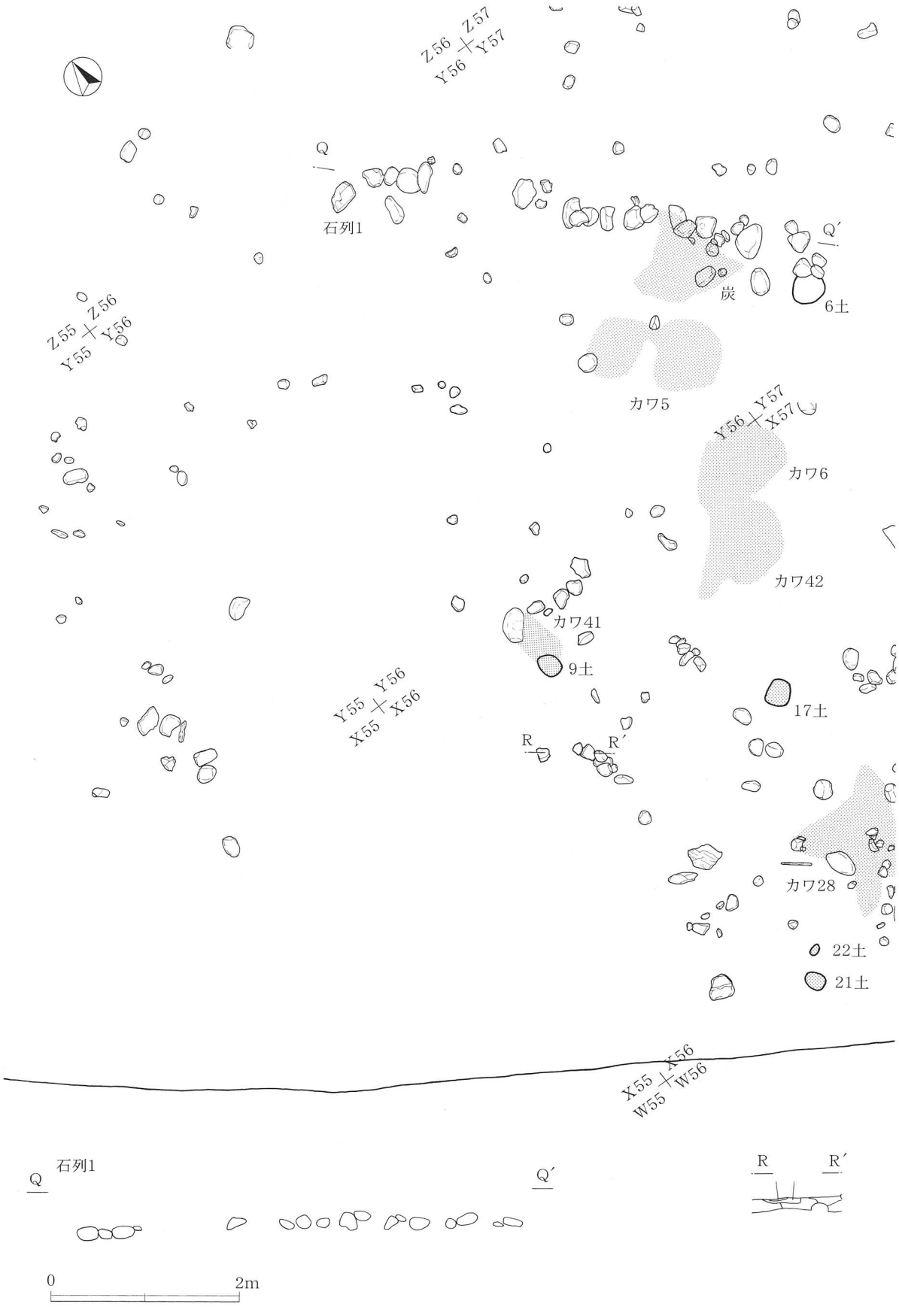
石列3
K 768.5 K′

0 2m

第9図　遺構の土層



第10図　遺構配置図（4）　（1/60）



第11図　遺構配置図（5）　（1/60）

を造成している。その中から部分的に炭化物層や微細なカワラケが検出された。特に、カワラケ溜まり7は貼り床2の下から検出され、器形が復元できる遺物が多く見られる。貼り床を造成する以前に行われた神事で使用したカワラケではないかと思われる。また、貼り床とおそらく同じ理由で、カワラケと炭化物を多く含んだ土で池を埋め立てた後がカワラケ溜まり21と22であると思われる。しかし、一部で器形復元のできるカワラケが出土するところから、池が埋め立てられる以前に神事後廃棄されたカワラケが含まれていることが考えられ、池が廃棄されたときにその上に炭化物とカワラケの細片を含んだ土によって埋められたと考えられる。

3．石列

石列は3まで遺構番号を設定したが、そのうち2はカワラケ溜まり1の項で、3は溝址・池状遺構との関連の中で述べたので、石列1についてここで述べたい。石列1はグリッドY 56・57に位置する（第11図・図版5－1・2）。石列の長さは480㎝で南東から北西へ伸びている。石の大きさは19㎝～38㎝で大きめである。一部炭化物が密集する範囲が石の上に乗っており、6号土坑の上に石が乗っている。直線に並ぶという点では石列3と同じであるが、石列1と3は直線には並ばずやや曲がっている。また、この間には大きめの石は確認できず、両者の関連性は不明である。

4．土坑

土坑は19基検出された。そのうち100～110㎝×70㎝大の大きさの土坑Ⅰ群と、掘立柱建物址の柱穴と思われる土坑Ⅱ群の2種類に分けられると思われる。3号土坑については1号礎石建物址に関係する遺構と考えられるため、異なる性格の遺構であると考えられる。

Ⅰ群

1号土坑（第5・12図・図版6－3・4）　遺構の半分を発掘のための排水路にしてしまったため、わかっている部分の規模を見ると、直径104㎝、深さ13㎝の遺構である。平面プランはおそらく円形と考えられる。内部からは器形復元できるカワラケが多数検出された。一部炭化物を含む土で埋められていた。

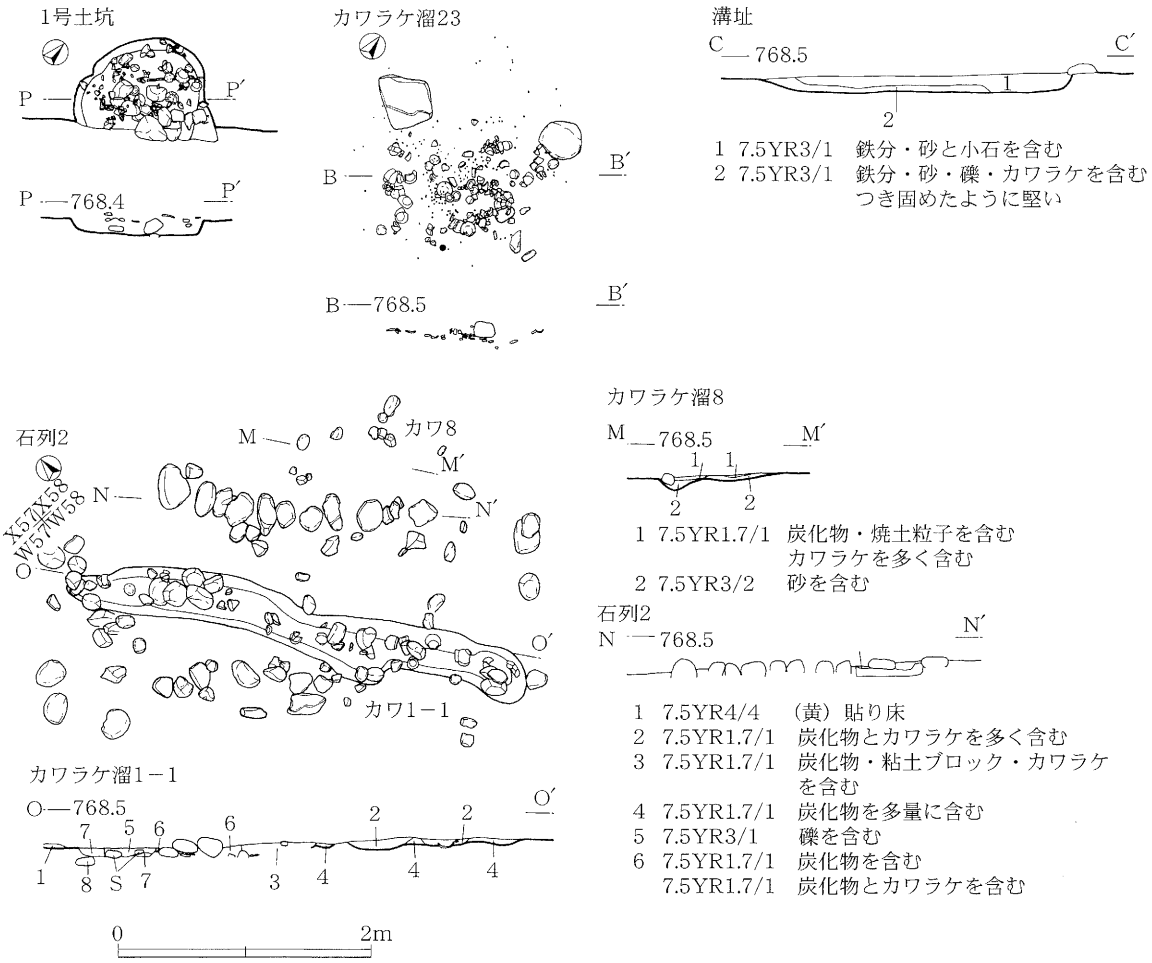
7・8・10号土坑（第10図）　炭化物が密集する場所が所々で見られ、掘り上げると2㎝～10㎝の深さの浅い土坑状の遺構となる。しかし、カワラケ溜まり1－2や24なども同様の遺構と考えられ、別々な遺構名を付してしまったが、本来ならば同じ遺構なのであろう。遺構の上面プランは楕円形か不整形、断面形は浅い皿状で下端はよくわからなかった。すべての遺構で内部から炭化物とカワラケの小片で充填されていたが、10・11号土坑のように、中に焼土粒子を伴うものもある。

Ⅱ群

6・9・13・14・15・16・17・21・22号土坑がⅡ群の土坑である。土坑は大体14㎝～36㎝ほどの口径で、深さは浅い。形状からおそらく掘立柱建物址の柱穴と思われるが、散発的に発見されるのみで明確に掘立柱建物址になるものはない。土坑内から炭化物やカワラケを検出する事例が多い。

5．カワラケ溜まり

カワラケ溜まりは42基確認できたが、同一地点でも上層と下層では様相の異なるカワラケ溜まりとなっているものもある。例えばカワラケ溜まり1－5と25では、上層にカワラケの細片のみで構成されるカワラケ溜まり1－5があり、下層になると器形復元ができるカワラケを含むカワラケ溜まり25になるという遺構である。これは、神事を行った後に廃棄されたカワラケ溜まりの上を、何らかの事情で炭化物とカワラケの細片を含む土で造成を行ったことによるものであると考えられる。前述の通りカワラケが出土するところは、ほとんど炭化物が一緒に検出されるためスクリーントーンは同じものにした。



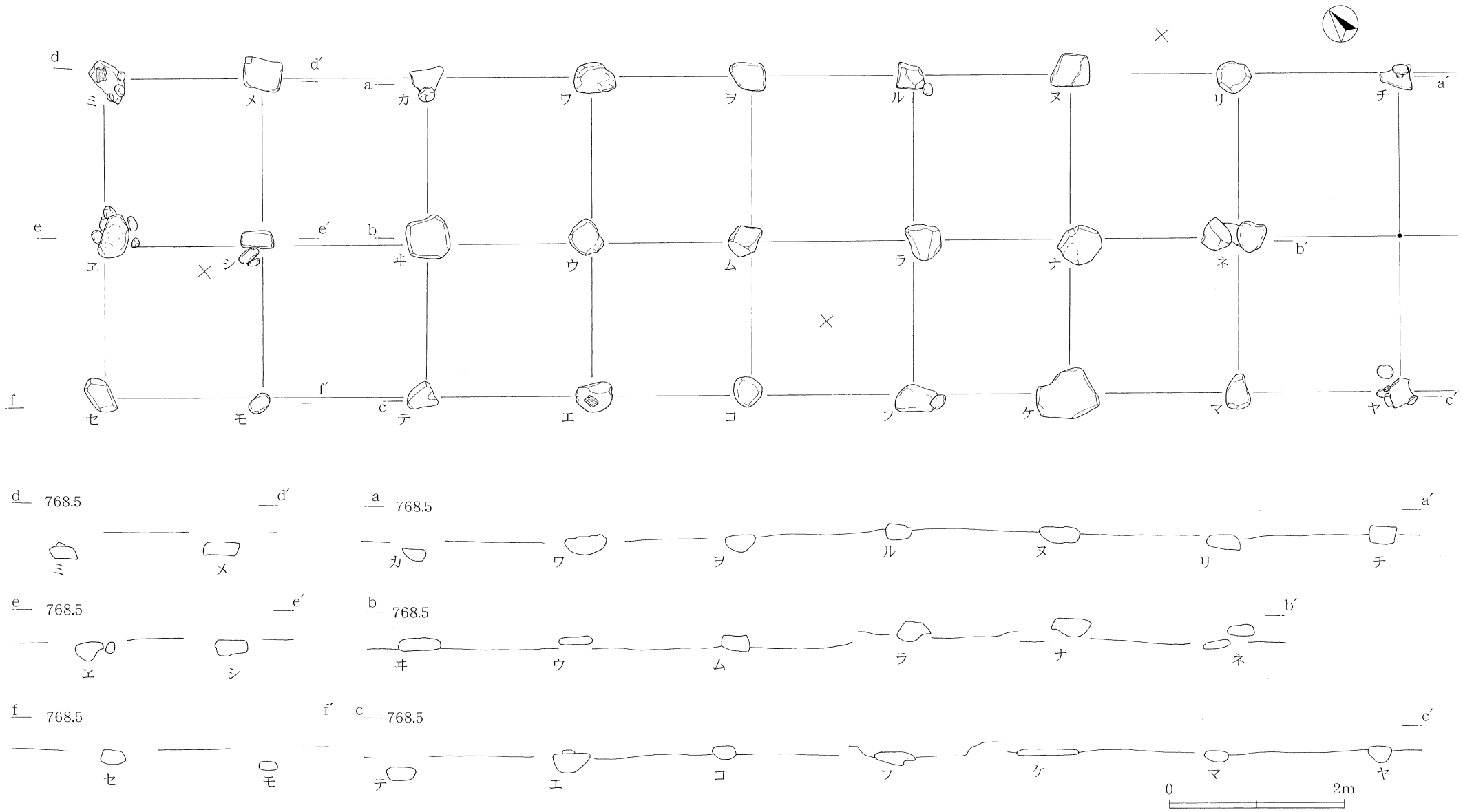
第12図　土坑・溝・カワラケ溜り

カワラケ溜まり1・8・石列2（第10・12図・図版6−5〜8・7−1〜3）　調査区南隅、グリッドW57・58に位置する。当初、一帯がカワラケ溜まり1と考えていたが、掘り進めていくうちに何ヶ所かに炭化物が密集する場所に分かれたため枝番を付した。その中心となるのはカワラケ溜まり1−1である。カワラケ溜まり1−1は上面に260㎝×80㎝の範囲で炭化物が密集し、カワラケの小片を多く含んでいた。土層を見ると2・3がこの層に当たる。また、1層は貼り床として黄色い土を敲き締めた層であり、カワラケ溜まり1−1はこれらの貼り床を掘り込む形で作られている。これを取り除くと第12・15図や図版7−1に見られるように器形復元ができるカワラケが列状に検出された。これらのカワラケは368㎝×48㎝の細長い掘り込みの中に廃棄されていたことが掘り進めるうちに判明した。

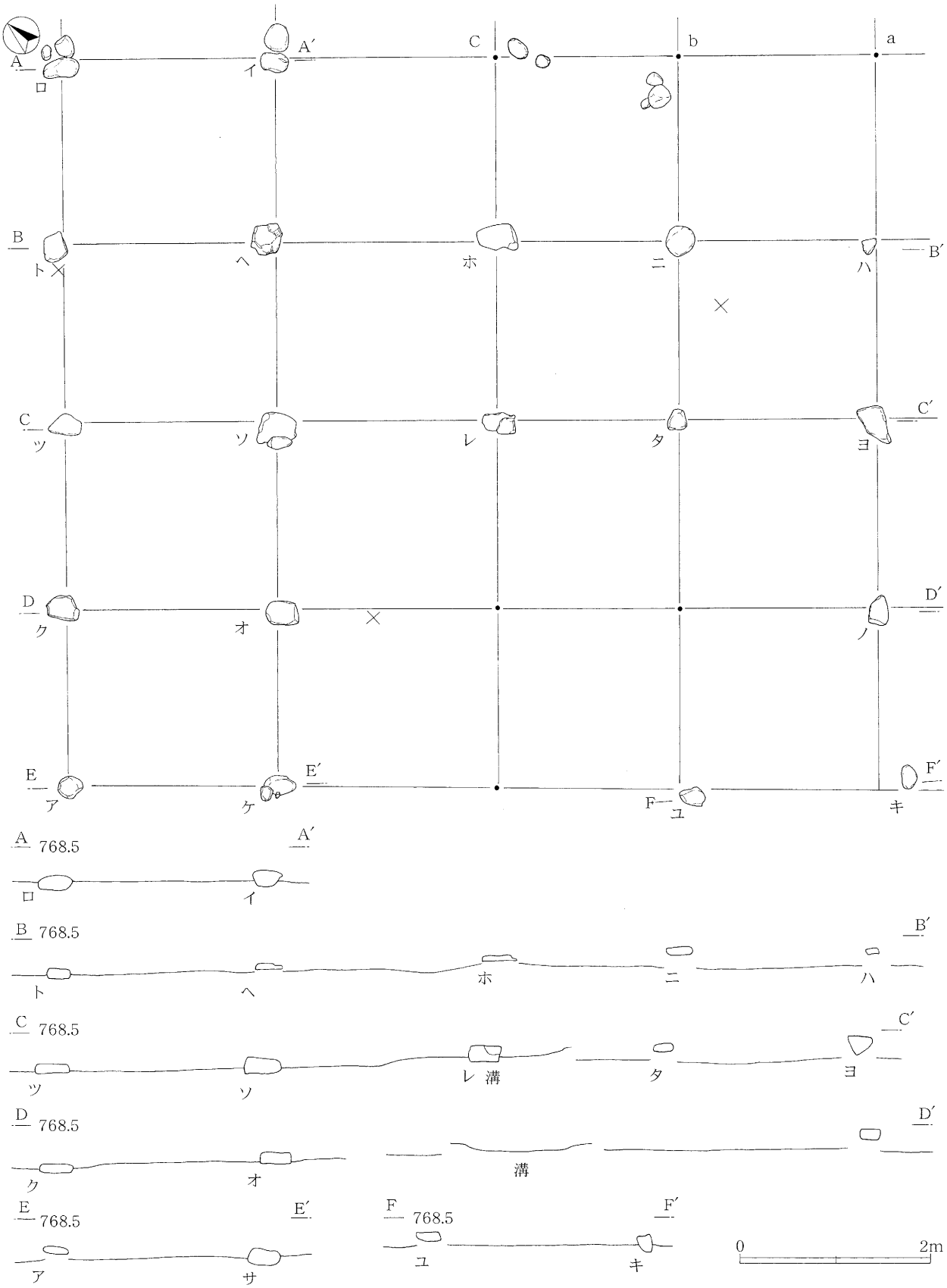
カワラケ溜まり1−1の下から20㎝〜30㎝大の石が検出された。これは、石列2とほぼレベルが同じため同一の遺構と考えられる。石列2と合わせて考えると302㎝×184㎝の範囲で、長方形に石を配置した遺構であると考えられる。この遺構の上部にカワラケ溜まりが作られたと考えられるところから、カワラケ溜まりより古い遺構であることが考えられる。

石列2の北東側にはカワラケ溜まり8がある。第1層中からは多くのカワラケと焼土粒子が検出された。カワラケ溜まり1−1との関係性は不明である。

カワラケ溜まり7（第8図）　グリッドY58・59に位置する。溝址のプランを一部拡幅してカワラケを廃棄するための遺構を作ったように見える。この場所は貼り床2によって埋められており、貼り床中にカワ



第13図　1号礎石建物址（1/60）



第14図　2号礎石建物址（1/60）

ラケの小片を大量に見いだすことができる。この小片は貼り床とともに突き固められていた。その下層からは器形復元ができる大きめの破片のカワラケ片が検出された。

カワラケ溜まり23（第6・12図・図版7－4～8・8－1）　調査区の東隅グリッドY59・60・Z59・60に位置する。遺構の範囲は170㎝×100㎝である。292片ものカワラケが深さ22㎝の深さで廃棄されていた。これらのカワラケは器形復元ができるものが多く、神事を行った後廃棄された遺構であると考えられる。その時に簡単な掘り込みがなされたのではないかと思われる。この遺構内からだけ手捏ねカワラケⅠ群2類が出土している。

カワラケ溜まり28（第10図・図版8－2）　グリッドX56に位置する。遺構の範囲は159㎝×123㎝である。他のカワラケ溜まり同様、上部から多くの炭化物とともにカワラケの小片を検出している。その下部から器形復元できるカワラケが多く出土した。これらは、5㎝～20㎝大の石とともに出土している。

6．焼土址（第8・9図・図版8－3～6）

焼土址は調査区内に点在し、大体は焼土址3のように貼り床に伴って検出されることが多い。最も焼土範囲が広いのは焼土址1で、108㎝×90㎝である。しかし、ほとんどの焼土址は20㎝程の範囲の小さいものが多い。焼土址1の焼土の厚さは5㎝、焼土址2は2㎝である。周辺に炭化物を伴うものが多く、焼土址1と2では焼土の下に炭化物層があった。おそらく二つの焼土址の周辺は範囲が確定できなかったが、貼り床4に伴う遺構であろう。

7．貼り床

貼り床は調査区内の広範囲にわたって検出された。遺構として番号を付したのは貼り床1から11までである。しかし、貼り床は広範囲に亘るため、図面の煩雑さを避けるためにスクリーントーンで図示しなかったものもある。貼り床2と3は調査を進めるうちに一つの遺構であることがわかった。

貼り床1・7（第10図）　グリッドV57・58・W57・58・X56・57・58と非常に広範囲にわたる遺構である。ベルト5は貼り床1・7とカワラケ溜まり1を横断する断面図である。ベルト5の土層観察は次の通りである。

1層	7.5YR3/1	炭化物を含む。貼り床。
2層	7.5YR3/1	炭化物とカワラケ片を多く含む。黄色粒子（粘土）を含む。貼り床。
3層	7.5YR3/2	炭化物とカワラケ片を多く含む。焼土粒子を含む。貼り床。
4層	7.5YR3/1	炭化物とカワラケ片を多く含む。貼り床。
5層	7.5YR3/2	炭化物と粘土・カワラケを多く含む。貼り床。
6層	7.5YR3/2	炭化物を含む。粘土を少量含む。
7層	7.5YR1.7/1	炭化物と焼土粒子を含む。貼り床。
8層	7.5YR3/2	炭化物と粘度粒子を含む。
9層	7.5YR3/2	（黄）　粘土の貼り床。
10層	7.5YR3/2	炭化物と粘度粒子を含む。
11層	7.5YR1.7/1	すべて炭化物。粘性・締まりなし。
12層	7.5YR4/6	（黄）　粘土の貼り床。
13層	7.5YR3/2	炭化物・粘度粒子・カワラケを含む。
14層	7.5YR3/2	50㎜以下の石を多く含む。
15層	7.5YR3/2	炭化物を含む。カワラケ溜まり。
16層	7.5YR3/2	炭化物・粘土粒子を含む。貼り床。
17層	7.5YR3/2	（黄）　炭化物・粘土・カワラケを含む。
18層	7.5YR3/2	炭化物と小石を含む。
19層	7.5YR3/1	炭化物と石を含む。
20層	7.5YR2/2	砂と木を含む。

21層　7.5YR3/2　粘土粒子と小石を含む。
22層　7.5YR3/2　炭化物を含む。カワラケ溜まり。
23層　7.5YR3/1　100㎜以下の石と砂を含む。
24層　7.5YR3/1　炭化物と小石を含む。
25層　7.5YR3/2　炭化物と小石を含む。
26層　7.5YR2/2　小石を含む。
27層　7.5YR3/2　石と砂を多く含む。

以上の土層のうち、貼り床は1から7層・9層であり、かなり堅緻な層である。粘土を部分的に用いているところが見られる。また、9層と12層は貼り床7であり、粘土を用いて貼り床がなされている。この遺構は、まず黄色い粘土を下に貼り、その上部に炭化物が多量に入った土を入れ、その上部にさらに黄色の粘土を貼るという構造である（図版8－7・8）。

貼り床2・3・10（第5・8・9図・図版9－2・3）　貼り床2と3は前述の通り同一の遺構であるが、その中で貼り床7同様、粘土で構成されている部分を貼り床10とした。位置はグリッドX58・59・Y58・59である。その中の貼り床10はX58に位置する。粘土の貼り床が散布するところから、貼り床10に1と2の枝番を付けた。重複する遺構は溝址・池状遺構・カワラケ溜まり7である。貼り床2・3は溝址・池状遺構・カワラケ溜まり7を埋めて作られている。範囲は768㎝×360㎝で非常に広い。貼り床2・3・10－1の土層観察は第9図にある。まず、ベルト1の土層を見ると、11層から北西側の層が溝址・池状遺構の土層と考えられ、その上部に7・8・9・10層の貼り床がなされている。ベルト2では、21層から北西側が溝址・池状遺構であると考えられる。その上部に1層の焼土址3や炭化物層・粘土を用いた貼り床を見ることができる。貼り床10－2では、粘土を用いた貼り床の上部に焼土があることがわかった。貼り床10－1には、貼り床7同様に黄色の粘土を突き固めた場所があった。

貼り床11（第5・8図・図版1－1・5－3～5）　グリッドY57・58に位置する。貼り床4の一部と考えられるが、この部分だけ粘土で構築されている。石列3の下まではこの粘土の面は伸びてはいなかったので、石列3とは重複しない遺構である。遺構の範囲はL字状に248㎝×144㎝である。

8．集石（第7・8図・図版5－3・5・6・9－4）

集石は2基検出されている。1号集石はグリッドイ57・58に位置する。5㎝から50㎝の石によって構成され、下層になるほど石が大きくなる。特に南西側の石は大きい平石である（第7図・図版9－4）。集石2は石列3や溝址・貼り床11・カワラケ溜まり15～17に囲まれたところにあり、グリッドY58に位置する（第8図・図版5－3・5・6）。5㎝～30㎝の小さめの石で構成されているが、南東側に比較的大きな石が入る傾向にある。周辺の遺構との関係は不明である。

第3節　発掘された遺物

出土遺物は中世の遺物がほとんどで、明確にその他の時期と判明できる遺物はとても少ない。出土点数は、中世18,592点・その他の時期の遺物が9点である。中世以外の時期の遺物は、黒曜石4点と古代の須恵器甕が5点出土している。

中世の遺物の内訳は、カワラケ18,326点で98％、その他の遺物は266点で2％しかない。その内訳は内耳土器7点　3％・瓦器63点23.6％・舶載磁器22点8％・瀬戸美濃系陶器134点50％・中津川・常滑産甕35点　13％・中世須恵器1点　0.4％・銭貨4点2％で、圧倒的にカワラケが多い。以下、中世の遺物の詳細を見ていきたい。

カワラケ（第15・16図）　前述したように18,326点出土しており、7区の遺物の98％を占める主体と

なる遺物である。これらのカワラケは整形方法と法量で以下の通りに分類できる。

Ⅰ群　手捏ねカワラケ　ロクロを使用しない内型成形のカワラケである。これは、次の2類に分けられる。

1類　白カワラケ　胎土が白色のカワラケである。破片ばかりで図示できる物はなかった。48点の破片が出土している。

2類　1類とは異なる胎土のカワラケで深振りである。2段に横ナデされている。9点出土しているが、ほとんどがカワラケ溜まり23から出土している。他にはグリッドY 57・58・カワラケ溜まり1から1片づつ出土している。図示した遺物はいずれもカワラケ溜まり23のもので47～49である。

Ⅱ群　ロクロ整形カワラケ　ロクロを使用したカワラケ。法量から以下の4類に分けられる。

1類　口径21～48㎜・底径34～38㎜・器高11～18㎜の小カワラケ。12点出土している。カワラケ溜まり1－1・21・23・27・40、X56・Z59で出土している。カワラケ溜まり内には1点づつこの形式のカワラケが含まれている可能性がある。図示したのは14・38・50・86・115である。

2類　口径78㎜・底径42㎜・器高26.5㎜で、3類と口径はほぼ同じであるが、底径が小さく器高が高いカワラケ。個体数は少なく、確認できたのはカワラケ溜まり1－1・28・W56などから出土した5点だけである。図示できたのは15と88だけである。

3類　口径68～96㎜・底径42～72㎜・器高11～18.5㎜の口径と底径に差があまり無い皿状のカワラケ。3類の全点数は12,142点で、カワラケ全体の66.8％を占める。次の4類と主体をなすカワラケである。以下の分類の基準にした整形方法の他に、見込み部の外周をドーナツ状に凹ませているのが特徴の一つである。すべてこの整形方法をとっている。このカワラケは成型方法から以下に細分できる。

1　見込み部にナデのあるもの（図版10－2）。

2　見込み部にナデのないもの。

上記の2つの分類は、底部に糸切り痕のみ（a）あるものと糸切り痕と板状圧痕があるもの（b）（図版10－3）が確認できるかできないことにより2つに分けられる。

図示したカワラケで、該当する遺物は以下の通りである。

Ⅱ群3類1－a　1・8・9・16・29・39・39・108・112・117～119・121・122

Ⅱ群3類1－b　2・3・10～12・17・34・40～42・46・84・84・89～93・123・125・126・130

Ⅱ群3類2－a　4・18～21・23・28・30・35・43・51～67・79・82・85・87・94～98・103～106・109・110・124・127～129・131・132

Ⅱ群3類2－b　5・22・33・45・68・69・80・81・99・133～135

4類　口径105～153㎜・底径60～80㎜・器高22.5～41㎜で、3類より大振りのカワラケ。4類の全点数は6,010点で、カワラケ全体の32.7％を占める。3類とともにカワラケの主体をなす。これも3類同様見込み部外周をドーナツ状に凹ます整形を行っている。整形方法から以下に細分できる。

1種　内側に稜のあるもの。

1　見込み部にナデのあるもの。

2　見込み部にナデのないもの。

2種　内側に稜のないもの。

1　見込み部にナデのあるもの。

2　見込み部にナデのないもの。

上記の４つの分類は、底部に糸切り痕のみ（a）あるものと糸切り痕と板状圧痕があるもの（b）（図版10－３）が確認できるかできないことにより、さらに２つに分けられる。

図示したカワラケで、該当する遺物は以下の通りである。

Ⅱ群４類１種１－a　70・136　　Ⅱ群４類１種１－b　24・72～74・100・102

Ⅱ群４類１種２－a　25・32・71・75・137・138　　Ⅱ群４類１種２－b　44・76・77・139

Ⅱ群４類２種１－a　13・26・27・36・113・116・120　　Ⅱ群４類２種１－b　78・107・114

Ⅱ群４類２種２－a　6・37　　Ⅱ群４類２種２－b　7・101

以上、カワラケを形態や整形方法について分類してきたが、大雑把に整形方法や法量によって分類すると、最も多いのがⅡ群３類の66.8％、次いでⅡ群４類の32.7％であり、その他のカワラケは0.5％であるところをみると、前述したようにⅡ群３・４類が主に使用されたカワラケで、他のカワラケは特殊な用途で使用されたことが考えられる。Ⅰ群１類は細片で遺跡内に散布する状態であったので、どのような使われ方をしたかは不明である。Ⅰ群２類は主にカワラケ溜まり23から出土し、カワラケ溜まり１－１や遺構外から出土したものは破片であるため、カワラケ溜まり23に付随するカワラケであると考えられる。今回の調査区内で主体をなすⅡ群３類・４類と供伴するところから、これらと同時期の遺物であることが考えられる。Ⅱ群１類はカワラケ溜まり１つに付き１点ずつ付随する遺物のようである。Ⅱ群３類の中で特筆すべき遺物は、カワラケ溜まり23から出土した69である（図版９－８）。このカワラケの底部には黒曜石片があり、もともと粘土の中に含まれていて整形中に露出したと思われる。これを見ると、黒曜石が含まれやすい場所の粘土を使用したか、カワラケを作成する場所に黒曜石があったかの２つの可能性が考えられる。このようなカワラケはこれまでの調査の中で１点しか確認していないが、下諏訪町では殿村遺跡と武居遺跡で１点ずつ出土しているのを確認している。Ⅱ群３・４類の数量比を見てみると、約２：１であり、３類２点に付き４類１点となる。神事に使用された物であれば、饗応に使用される器数は何らかの理由で固定されていたと思われる。

内耳土器　内耳土器の出土は非常に少なく、僅かに７点出土しただけである。破片は小片ばかりで図化できる物はなかった。

瓦器　瓦器の破片は63片出土している。この破片は小片ばかりだが、遺跡全体に散らばって分布している。接合関係はまだ確認していないが、接合するともしかしたら破片数は減るかもしれない。器種の大部分は火鉢と考えられ菊花文のスタンプが捺されている物も見られる。

陶器　中世の陶器は169点出土している。そのうち瀬戸美濃系古瀬戸陶器が133点・瀬戸美濃系大窯期陶器１点・常滑焼31点・不明１点である。時期で見ると古瀬戸後期の遺物がほとんどである。

陶器にかかっている釉の内訳を見ると灰釉93点・鉄釉19点・無施釉22点である。灰釉の内訳は、皿１（153）・縁釉皿１・縁釉折縁皿１・平椀45（154・155）・縁釉折縁深皿５（161・162）・卸皿６（160）・卸目付鉢７（156～159）・茶入れ１・注口２・片口１・捏ね鉢１・瓶2・瓶子１（167）・仏供１（166）・甕１・器種不明８である。鉄釉は縁釉小皿１（148）・天目茶碗10（149～152）・祖母懐８である。無施釉陶器は山茶碗13（147）・捏ね鉢８（163～165）である。常滑焼は31点出土しているがほとんどが甕である。１点だけ瓶と思われる遺物が見られる。甕類の中には、前述の灰釉の甕の他に、東濃産と思われる破片が４点見られる（168）。そのうちの１点には、内面に漆が付着しているものがある。

陶器全体の傾向を見ると、最も多いのは灰釉平椀の45、次いで天目茶碗の13で、椀類の比率が多いこ

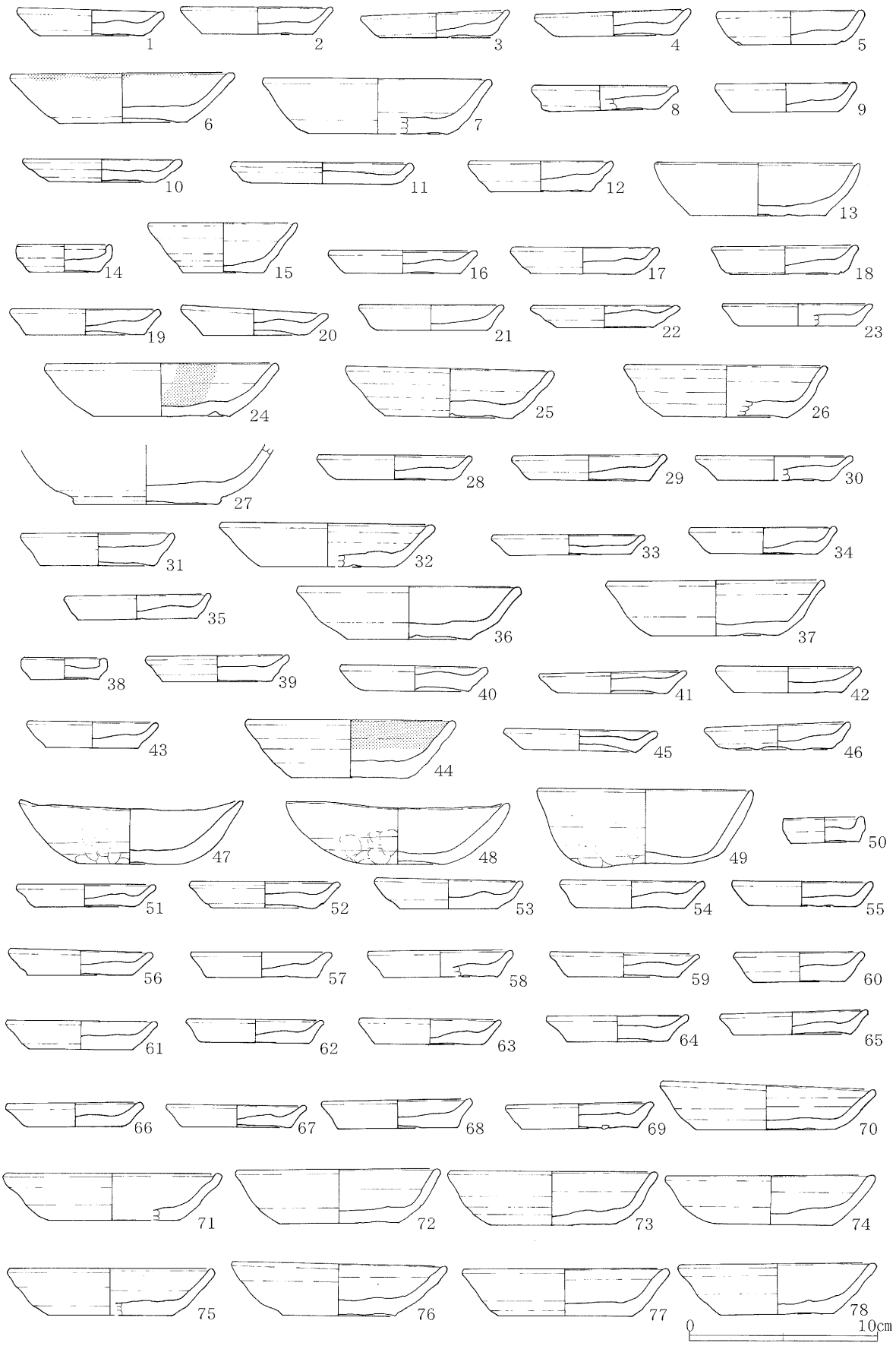
とがわかる。特徴的なのは、卸目皿・深皿・鉢・捏ね鉢等、食物を卸したり捏ねたりする遺物が多く見られるところであり、当時の食生活を考える上で重要な資料である。ほぼ神事しか行われていないと思われるこの場所で、なぜこのような食器が出土するのかは考えていかなければならない課題である。

瀬戸大窯期の遺物は169の1点だけ出土している。これは擂り鉢と考えられる物で、胎土は軟質で表面は錆鉄の釉がかけられている。口縁部の形状から大窯第1段階後半であると考えられる。

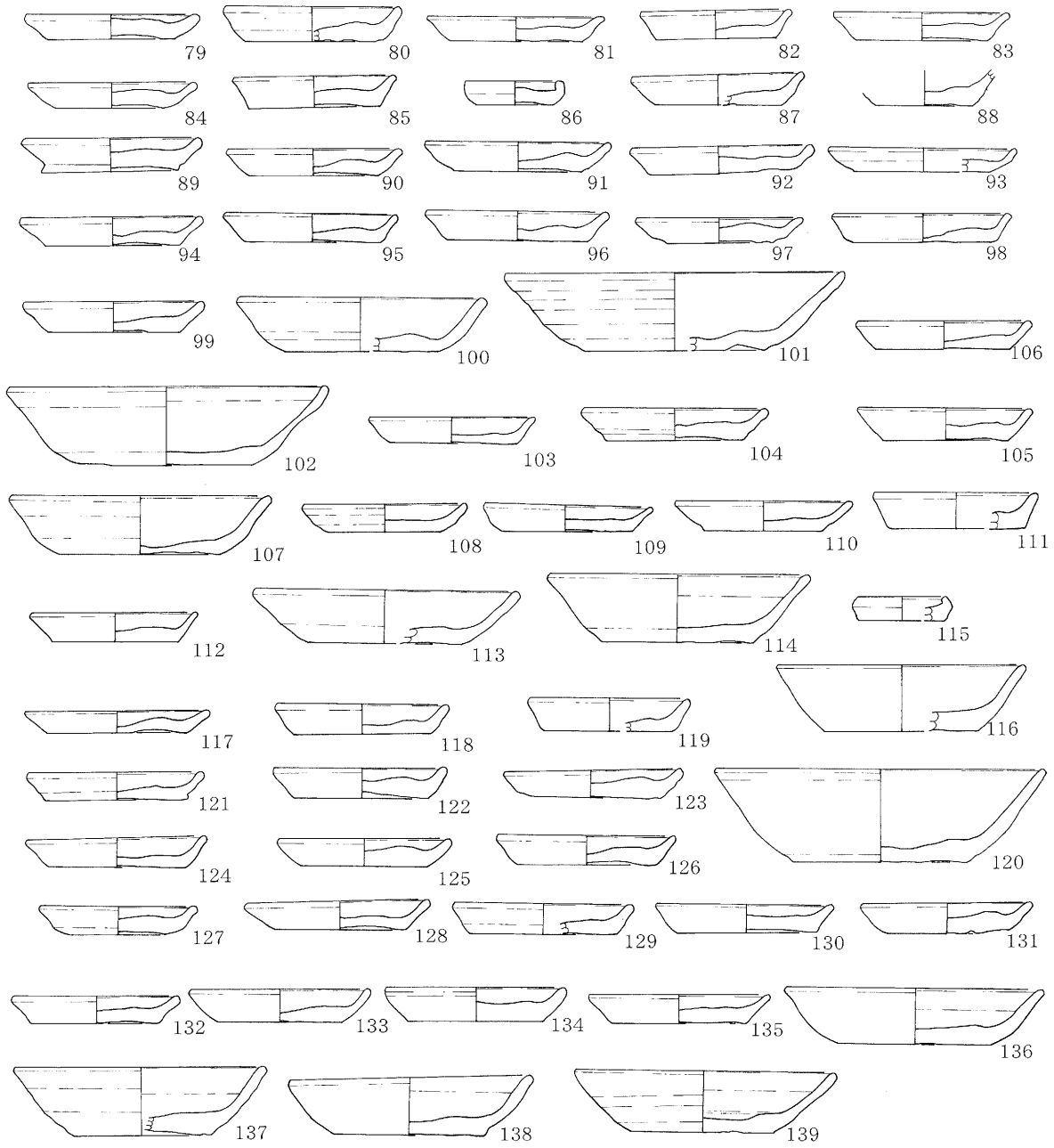
磁器　磁器は22点出土している。最も古い時期のものは140・143の白磁第Ⅳ類である。青磁は16点あり、鎬蓮弁文の碗9点・輪禿碗1点・その他碗2点・瓶1点・器種不明3点で、主な器種は碗である。図示した物は141・142・144・145・146である。146は内部まで釉薬がかかっているため、どのような器種かは不明である。青白磁は小破片が多く図示できる物はなかった。梅瓶1点・器種不明4点の5点である。

銭貨　金属製品では銭が4枚出土している。図化できたのは3点である。他の1点は粉々になっていたが、「聖」の形状で天聖元宝と判断した。170は篆書の元豊通宝、171は草書の元豊通宝、172は半分欠けていて「元宝」はわかるがその他の部分がわからないため銭種は不明である。

以上、遺物についてみてきたが、カワラケが圧倒的多数を占め、その他の遺物が若干存在する程度という遺物組成である。ごく少量出土する陶磁器類は、どのような使われ方をされていたのかを考えていく必要がある。



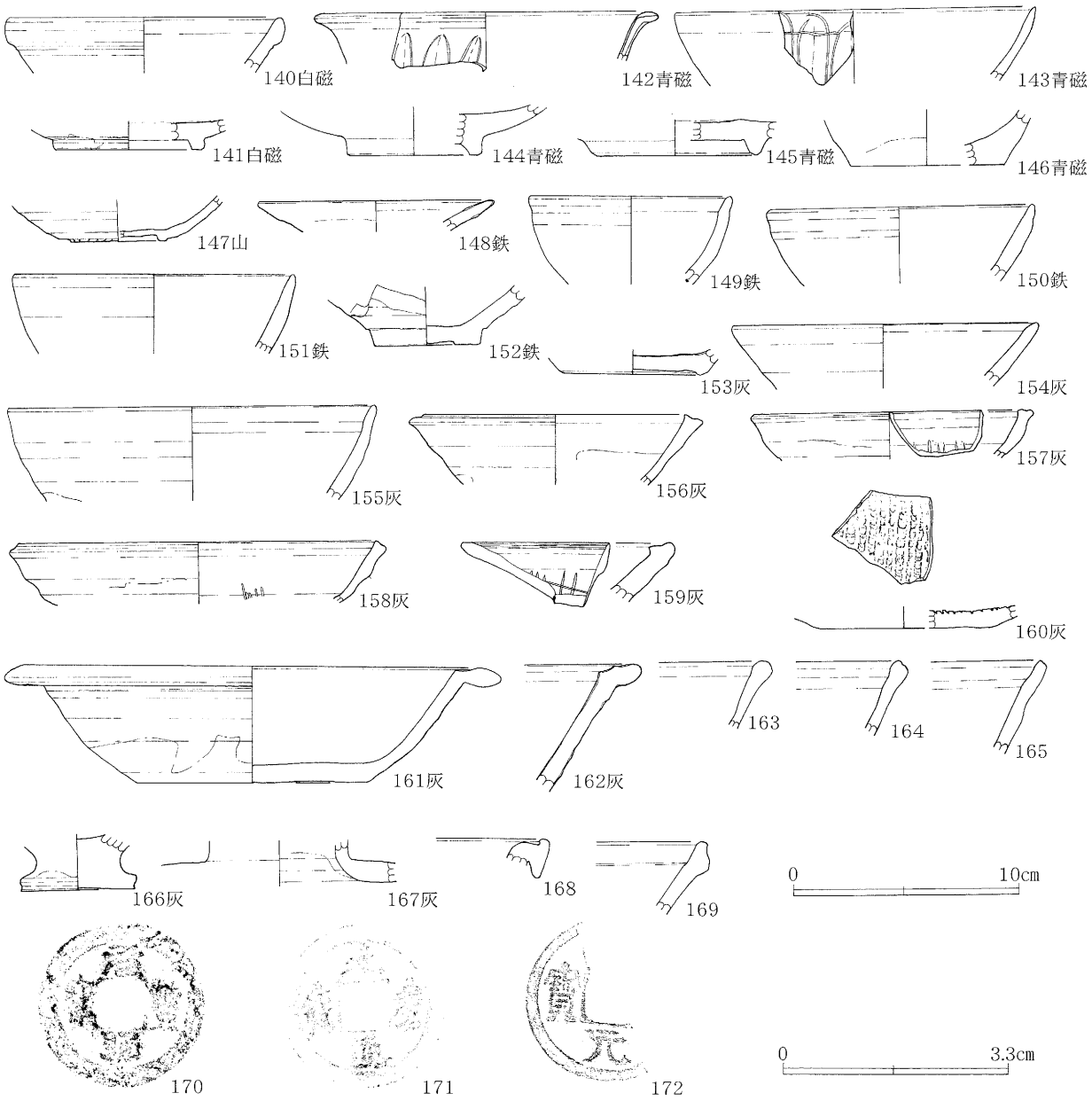
第15図　出土カワラケ（1）　（1/3）



1～ 7　1号土坑
8　7号土坑
9　30号土坑
10　礎石コ
11　溝址
12・13　池状遺構
14～27　カワラケ溜り1－1
28～31　カワラケ溜り1－3
32　カワラケ溜り1－5
33　カワラケ溜り6
34～36　カワラケ溜り7
37　カワラケ溜り17
38～44　カワラケ溜り21
45・46　カワラケ溜り22
47～78　カワラケ溜り23
79～82　カワラケ溜り24
83・84　カワラケ溜り25
85　カワラケ溜り26
86～87　カワラケ溜り27
88～102　カワラケ溜り28
103～105　カワラケ溜り29
106　カワラケ溜り31
107　カワラケ溜り32
108～111　カワラケ溜り33
112～114　カワラケ溜り34
115・116　カワラケ溜り40
117～119　カワラケ溜り42
120　貼り床3
121～139　遺構外

0　10cm

第16図　出土カワラケ（2）　（1/3）



140	白磁第Ⅳ類	147	山茶碗	161・162	灰釉折縁深皿
141	青磁折縁蓮弁碗	148	鉄釉縁釉皿	163～165	こね鉢
142	青磁蓮弁碗	149～152	天目茶碗	166	仏供
143	青磁碗(カワラケ溜1－1)	153	灰釉皿	167	灰釉瓶子
144・145	青磁碗	154・155	灰釉平碗	168	中津川産甕
146	青磁瓶	156～160	灰釉卸皿	169	

第17図　出土陶磁器　銭貨　（1/3）

第Ⅳ章　調査の成果と課題

今回の調査区は7区とした。これは、平成13年度に行った調査区を1区から4区に、14年度に行った調査を5区に、平成15年度に行った立会調査を6区に設定したためである。7区から検出された遺構は、礎石建物址2棟・溝址・池状遺構・カワラケ溜まり42・土坑4基・掘立柱建物址の柱穴と思われる土坑15基・石列2・集石2・貼り床11・焼土址である。発掘調査の結果について以下に見ていきたい。

礎石建物址　礎石建物址は2棟検出され、重複した状態で検出された。1号礎石建物址は2間×8間の建物址で、一部調査区外に出ていると考えられるものの、廊下状の長大な建築物であることがわかった。この建物によく似た建物が、諏訪上社前宮と本宮にある。前宮の神殿には現在でも「十間廊」という2間×10間の建物があり、本宮には「布橋」という幅2間で長さは不明であるが、まさに廊下と言った建物がある。1号礎石建物址に重複している2号礎石建物址は確認できている部分は4間×4間で、調査区外にも伸びていることが考えられるためかなり大きな建築物があったことがわかる。しかし、この2棟の礎石建物址は重複しているのにかかわらず、全く形状が異なっているため性格の違った建物であることが考えられる。第18図を見ると7区に隣接する4区からは2棟の礎石建物址が検出されているが、それぞれの軸線方向は4区1号礎石建物址N－49°－W、4区3号礎石建物址N－51°－W、7区1号礎石建物址N－49°－W、7区2号礎石建物址はN－48°－Wと4棟の礎石建物址の軸線方向はほぼ同じである。礎石建物址のある一帯は地面が堅くなっており、7区1号礎石建物址の北西側から泥層になっていき地面が軟弱になる。この堅い地面を利用してこれらの礎石建物址が建てられたことがわかる。4区の2棟の礎石建物址が、7区のどちらかの礎石建物址と同一時期になるかは現在検討中であるが、軸線方向が同じであるところからかなり計画的に建物配置が行われたことが想定できる。

カワラケ溜まり　カワラケ溜まりは調査区の南隅を中心として検出されている。7区の南側の2区の調査を行ったときに、かなり広い範囲でカワラケ溜まりが検出しており、2区のカワラケ溜まりを中心として神事が行われたことがわかる。4区礎石建物址1と3号礎石建物址の下からはカワラケが大量に出土していたが、7区礎石建物址下からは前者程は出土していない。礎石ソ・ム・オ上にカワラケ溜まり12・13・14があったが、礎石上にあるため建物址が無くなった後にこの場にカワラケが廃棄されたと言うことになろうか。カワラケ溜まり23は礎石ヌ・ニとは重複していないため、礎石建物址より以前か、建築中に廃棄されたと考えられる。その他のカワラケ溜まりは礎石建物址の南西側にある場合がほとんどであり、礎石建物址の南西側が神事を行う場所であったことが想定される。調査中は水が漬いていたり黒色土であったため、掘り込みのプランが確認できなかった事が多いが、1号土坑を見ると円形の掘り込みがなされてその中にカワラケが廃棄されていることがわかる。カワラケ溜まり1－1は細長い掘り込みの中にカワラケを廃棄しており、カワラケ溜まり23は遺物が確認面から22㎝下まで遺物が出土しているところを見ると、ただ単にカワラケ溜まりとしたところでも、何らかの掘り込みをしてその中にカワラケを廃棄した事が考えられる。

溝址・池状遺構　溝址は宮川側から南西方向に礎石建物址と直交して作られており、その南西側に池状遺構がある。一応2棟の礎石建物址よりも古い遺構としているが、もしかしたらどちらかの礎石建物と同時存在していた可能性もある。そのように考えると礎石建物址の下に溝があったことになる。池状遺構は石列3が若干湾曲し、カワラケ溜まり21・22がやや不整形ではあるが円形のプランを持つことから、石列3を護岸とする掘り込みがあったと判断したため、池状遺構とした。南側の範囲はよくわかっていないが、貼り床3

の下部まで伸びていると考えられる。カワラケ溜まり21の内部には多くの炭化物とカワラケが多く出土しているので、これらを大量に含んだ土で埋め立てが行われていたことが考えられる。しかし、下層の遺物となると器形復元可能な遺物が多いところから、池状遺構があったときから、中に神事などで使用されたカワラケが廃棄されていたと思われる。

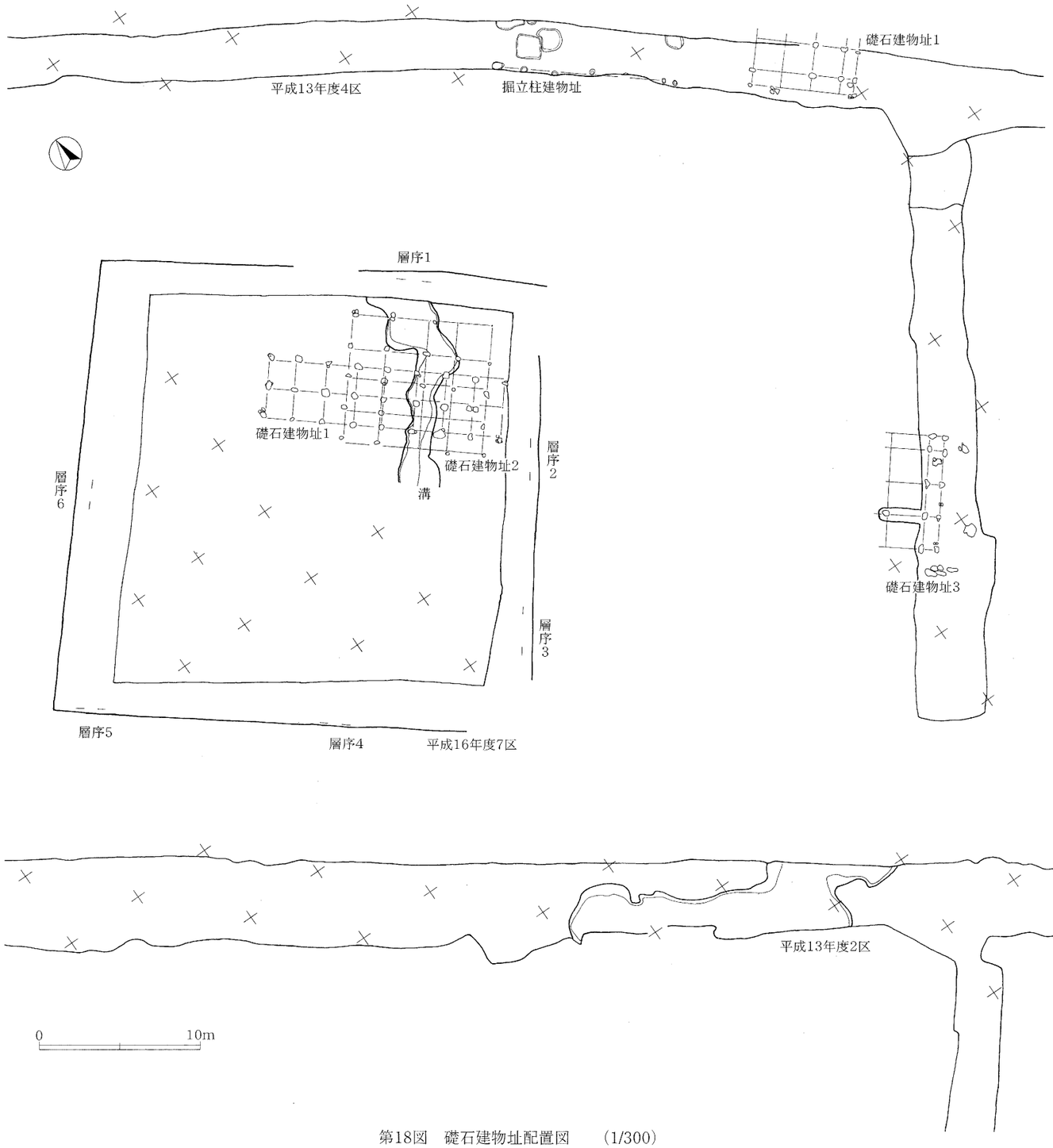
貼り床・焼土址　貼り床は礎石建物址にはあまり重複しない場所に構築されている。溝址・池状遺構の一部を埋め立てて貼り床がなされているため、溝址・池状遺構が使用されなくなった後に貼り床が構築されたことがわかる。スクリーントーンを貼っていないが、遺跡の南西側のほとんどは貼り床である。この貼り床を部分的に掘って、炭化物と粉々になったカワラケを含んだ土を埋めている遺構が所々で見られる。他に、貼り床を掘り込んだ小さな土坑があり、この遺構は掘立柱建物址の柱穴と考えられるが、貼り床上に建物があったことを伺わせる。しかし、現在の所うまく柱穴が揃わずどのような建物があったのかはわかっていない。貼り床上にはカワラケ溜まりの他、点々と焼土址が見られる。小規模なものから焼土址1のようにやや広めのものがあるが、用途の違いはわかっていない。調査区内の所々で火が焚かれていたと思われるが、理由は今ひとつ不明である。遺物ではカワラケ以外のものはほとんど見ることはできないが、粉々になった瓦器が見られるため何らかの関連性があるのではないかと考えられる。

7区の概観　個々の遺構について見てきたが、それぞれの遺構がどのように関連し合っていたかを考えていきたい。2棟の礎石建物址が他のどの遺構と同時期であったかは現在の所わかる資料はないが、貼り床やカワラケ溜まりとあまり重複していないところから、同時存在していた可能性が考えられる。カワラケは神事に使用してから1回で廃棄されてしまう器と考えれば、礎石建物址の南西側が主な神事を行う場所であったことがわかる。その神事を行う場所は、粘土などを貼った貼り床がなされた場所であり、所々に掘立柱建物址が点在していたことがわかる。

調査区の北西側には集石1とカワラケ溜まり4以外の遺構は発見されず、北西側には礎石建物址群は伸びないと考えられる。これは、2区・4区の調査でも明確な遺構が発見されていないことにもよる。南東側には4区で発見された2棟の礎石建物址があり、南東側に礎石建物址群が形成されていたことがわかった。

出土遺物を見ると、若干の陶磁器は見られるがほとんどはカワラケである。生活を物語る遺物はほとんど検出されていない。また、仏教的な遺物は磨滅の激しい第17図166の仏供のみであるところから、仏教的な神事が行われた場所ではなく、神社的な神事が行われた場所であることが考えられる。そのように考えると、160m離れた場所に現在の荒玉社があるところから、今回検出された遺構群は中世の荒玉社である可能性が大きいと思われる。

今後の課題　以上、7区の性格付を行ったが、個々の遺物について詳細に見る事ができなかった。遺物で問題になるのは、カワラケ溜まり23の手捏ねカワラケである。供伴しているものがロクロ整形カワラケであり、他のカワラケ溜まりのロクロ整形カワラケを見ている限り全く同じ物である。周辺から出土している陶器はほとんど古瀬戸後期（14世紀中頃～15世紀後半）のものであるため、この手捏ねカワラケがそれより古い時期の遺物ではないと考えられる。また、この手捏ねカワラケはカワラケ溜まり23以外では、遺構外で2点・カワラケ溜まり1－1では1点、破片で見られるだけで、かなり特殊な遺物であることがわかり、京系手捏ねカワラケとの関連を視野に入れるべきであろう。また、いわゆる白カワラケが若干ではあるが検出されており、かなり複雑な様相の中でカワラケ群構成されているようである。これは何に起因しているのかを考える必要がある。



第18図　礎石建物址配置図　　(1/300)

第Ⅴ章　結語

今回、初めて面的な調査を行うことができ、今まで把握しきれなかった礎石建物址の規模についてわかるようになった。これは大きな成果である。諏訪上社前宮を中心とする地域は、中世の記録に頻繁に出てくる場所であり、歴史の舞台であった。

荒玉社が最初に文献史料に現れるのは建武２年（1335）の『大祝職位事書』である。この史料には、諏方氏が大祝に就任するとき「十三所参」といって13の神社に詣でる神事があるが、そのうちの一つが荒玉社である記述がある。この時の大祝は頼継である。その後、応永４年（1397・有継）・文安５年（1448・頼長）・寛正７年（1466・継満）・文明16年（1484・師継）・文明17年（1485）・永正17年（1520・頼俊）・享禄２年（1529・頼寛）・天文７年（1538・頼実）の大祝就任の時にも荒玉社の記述がある。

また、延文元年（1356）作成の『諏方大明神画詞』にも荒玉社の神事について書かれている。これによると、毎年２月晦日に行われ、「二月晦日、荒玉ノ社ノ神事、当年ノ神使六人上臈六人「上臈六人 下臈二人」、童子、直垂ヲ着シテ出仕、饗膳アリ、」とある。宮坂光昭氏によると、荒玉社神事は農業開始の前に新しい稲の霊を祀る神事であるとしている（諏訪市史編纂委員会　1995）。諏訪上社の神事を１年勤める「神使」（おこう）達が、30日の精進潔斎を行った精進屋を初めて出て行う神事である。このことから諏訪上社の神事では重要な位置を占める神社であることがわかる。文中に「饗膳」とあるところを見ると、神事に関わって飲食がなされていたことが伺える。荒玉神事はその後も行われており、永禄８年（1565）の「諏訪上下社祭祀再興次第」や永禄10年（1567）11月12日付「武田信玄朱印状」・元亀元年（1570）の「春芳代官年貢所済注文」などに見ることができる。

江戸初期に成立したと思われる「諏訪大社上社古図」には、１間×１間の木造の荒玉社が１棟描かれており、おそらく絵図には省略されて描かれていると思われるが、現在の石祠とは全く異なった建物となっている（諏訪市文化財専門審議会　1997）。描かれた木造の荒玉社は、今回検出された礎石建物址の系譜を引く建物であろう。

遺跡の状況を見ると、荒玉社周辺遺跡内では２・４・７区と５区ではやや様相が異なると思われ、遺跡の中心が何ヶ所かあることが考えられる。第３図にはこれまで周辺で調査を行った成果も掲載したが、礎石建物址群が平成14年度調査の５区にあることがわかり、ここからはカワラケの他に天目茶碗を中心とする陶器類が非常に多く出土している点などは、今回の調査区とは異なりがあり、遺物組成差が集落内での場のあり方等を現しているように思われる。そういった意味で、今回検出された多量のカワラケを伴う礎石建物址群には、前述したように荒玉社を視野に入れて解釈すべきであろう。

また、荒玉社周辺遺跡の南方にある干沢城下町遺跡にも礎石建物址や掘立柱建物址が見つかっている。礎石建物址はその形状から堂宇と考えられ、信濃国安国寺の一部であると想定している。干沢城下町遺跡の礎石建物址は荒玉社周辺遺跡の礎石建物址と軸線がかなり異なっているが、干沢城跡のある城山の裾にあるため、地形の制約を受けた結果であろうと考えられ、軸線の異なり、すなわち、同一集落ではないという事ではなく、占有地形に沿った形の町割りが行われたことが読みとれよう。

諏訪地域の政治的・宗教的権力者であった大祝諏方氏が、諏訪上社前宮の「神殿」という現在社務所のある場所に居館を構えていたということが古記録に見えており、荒玉社周辺遺跡はその周辺に展開する遺跡であると考えられる。また、信濃国安国寺もこの地にあることが古文書等によって判明しているため、荒玉社

周辺遺跡を含めた諏訪上社前宮周辺は、善光寺と並ぶ信濃国の信仰の中心の一画に位置していると思われる。

〈参考文献〉

・自治体史

鳥居龍蔵　1924　『諏訪史』第一巻上　信濃教育会諏訪部会

茅野市　1986　『茅野市史　上巻　原始・古代』　茅野市

茅野市　1986　『茅野市史　別巻　自然』　茅野市

茅野市　1987　『茅野市史　中巻　中世・近世』　茅野市

諏訪市史編纂委員会　1995　『諏訪市史』上巻　諏訪市

諏訪市文化財専門審議会　1997　『改訂　諏訪市の文化財』　諏訪市教育委員会

・史料集

信濃史料刊行会　1971・1972　『新編信濃史料叢書』第二・七巻　信濃史料刊行会

※引用史料はすべてこの史料集からの引用

・発掘調査報告書

宮坂光昭・鵜飼幸雄・守矢昌文・樋口公雄　1983　『高部遺跡』　茅野市教育委員会

鵜飼幸雄・宮坂光昭・守矢昌文　1987　『磯並遺跡』　茅野市教育委員会

宮坂光昭・鵜飼幸雄・小林深志・守矢昌文　1990　『狐塚遺跡』　茅野市教育委員会

茅野市教育委員会　1991　『茅野市遺跡台帳』　茅野市教育委員会

守矢昌文　1993　『干沢城下町遺跡』　茅野市教育委員会

功刀司・柳川英司　1998　『干沢城跡』　茅野市教育委員会

功刀司・柳川英司　1998　『干沢城下町遺跡』　茅野市教育委員会

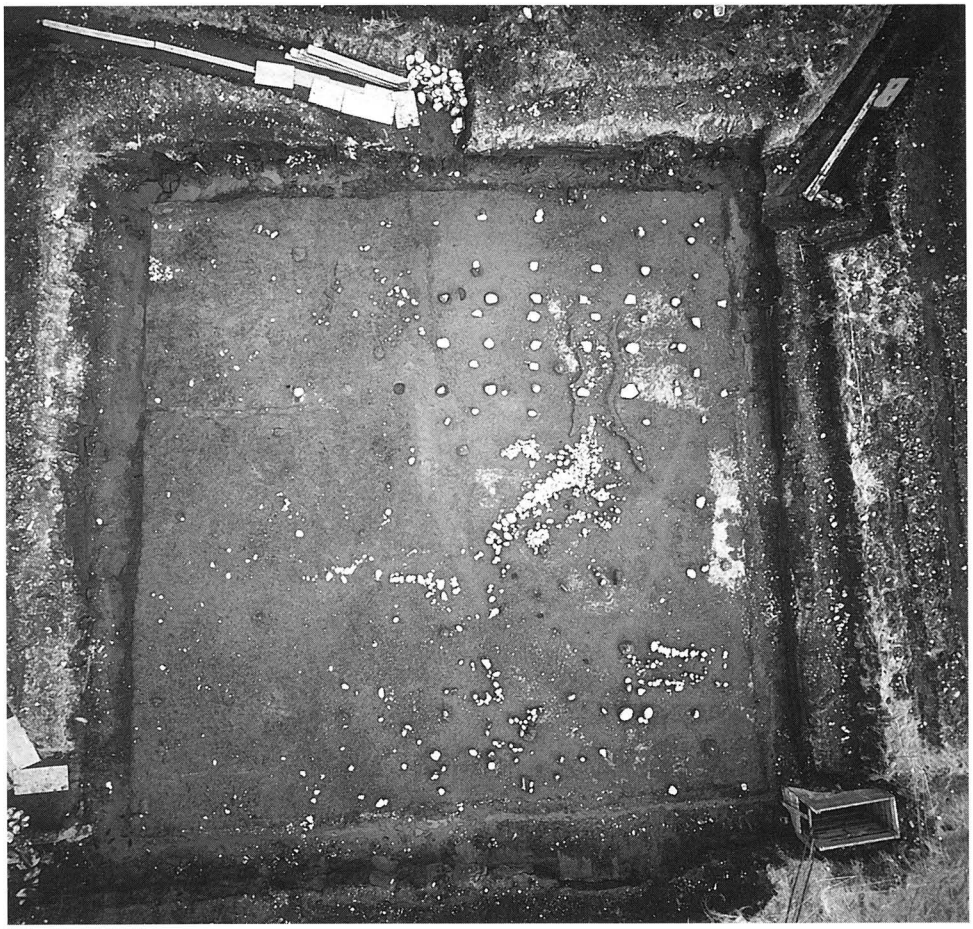
百瀬一郎　1999　『高部遺跡Ⅱ』　茅野市教育委員会

茅野市教育委員会　2000　『茅野市遺跡台帳』　茅野市教育委員会

・論文など

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁椀の分類」（日本貿易陶磁研究会　『貿易陶磁研究』№2）

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996　『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム　古瀬戸をめぐる中世陶器の世界　～その生産と流通～』　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

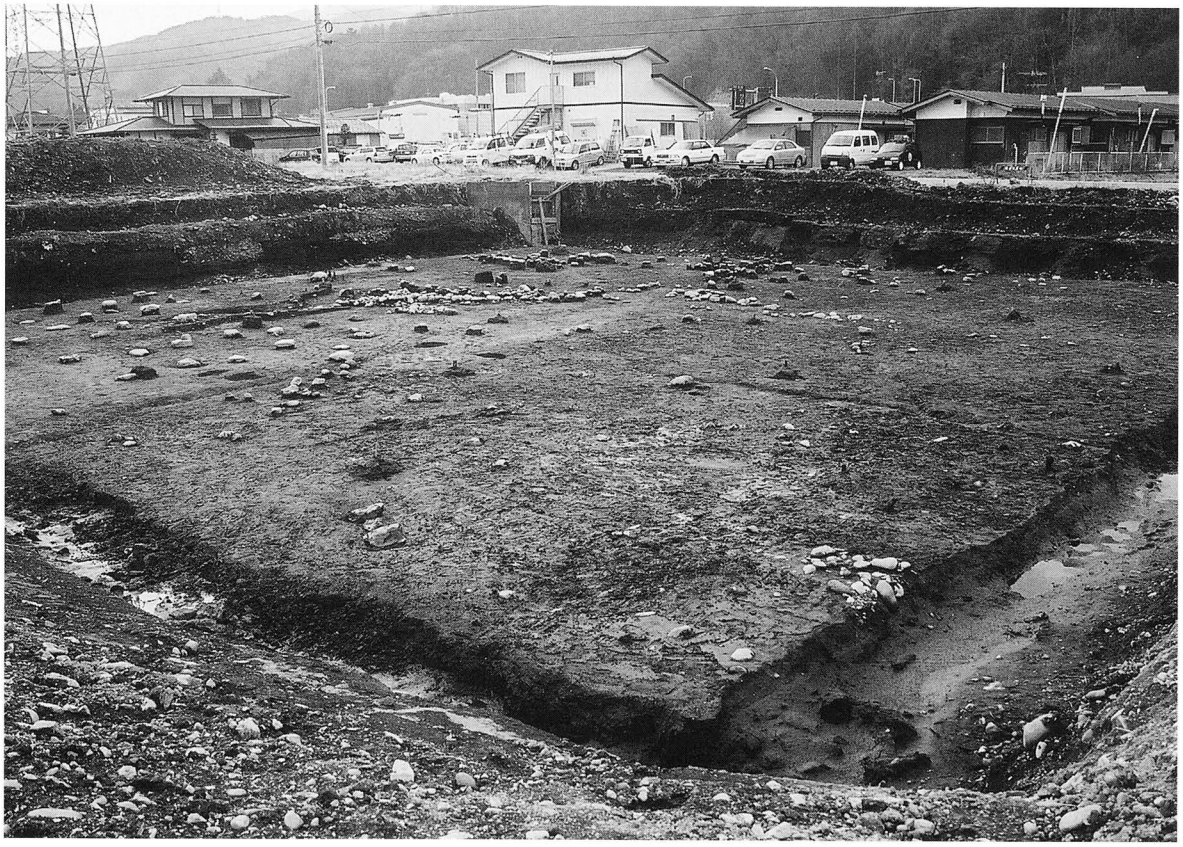


（1）遺跡鳥瞰写真

（2）遺跡空撮写真（東北より）

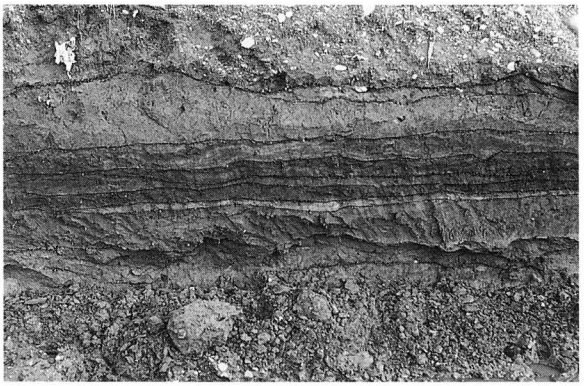
図版２

（３）遺跡全景（東より）



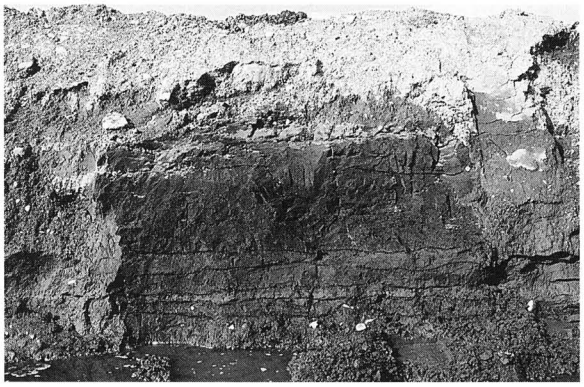
（４）遺跡全景（北より）

（1）層序1（南西より）

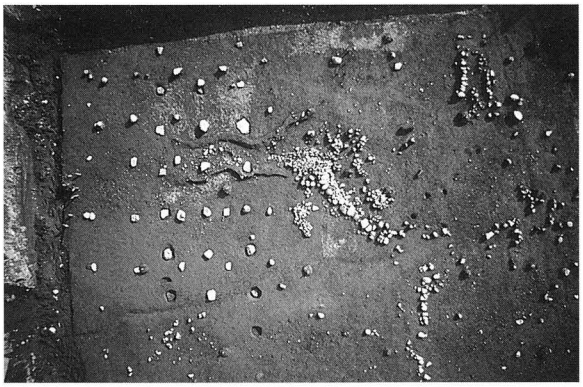


（2）層序2（北西より）

（3）層序4（北東より）



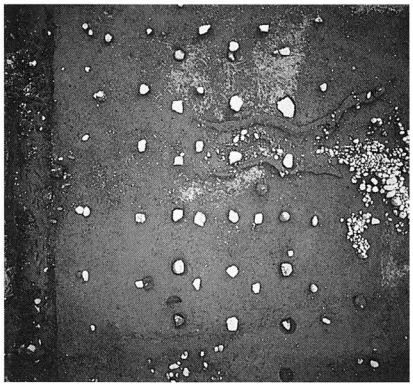
（4）層序6（南東より）



（5）遺跡南東側鳥瞰写真

（6）遺跡南東部（南東より）

（7）遺跡南東部（北東より）

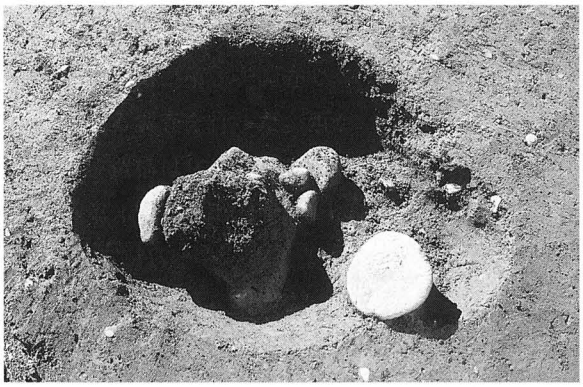


（8）礎石建物址1・2

図版４

（１）礎石建物址１・２（南西より）

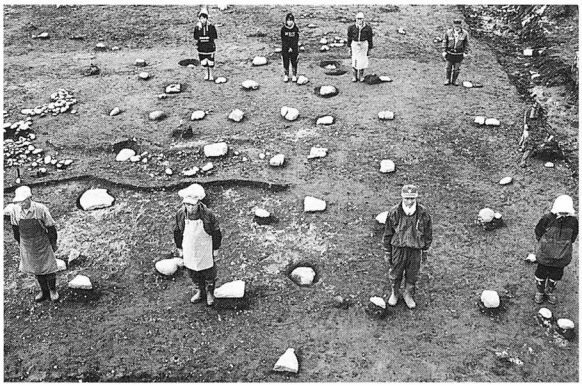
（２）礎石建物址（１）（人が立っている所）（南西より）



（３）礎石ヤ（北東より）

（４）礎石メ・シ・モ・ミ・ヱ・セ（北西より）

（５）礎石建物址１（北西より）

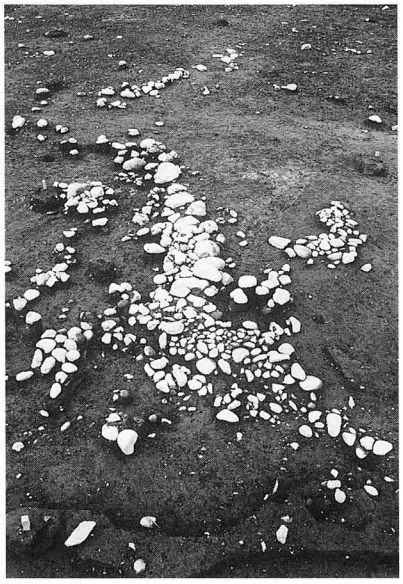


（６）礎石建物址２（南東より）

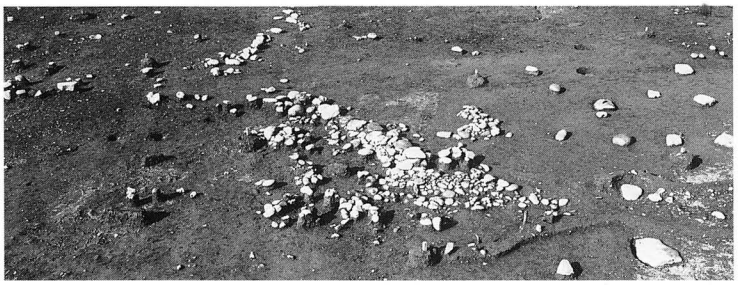
（７）池状遺構　石列１・３

（1）石列1（北西より）

（2）石列1・3（北西より）

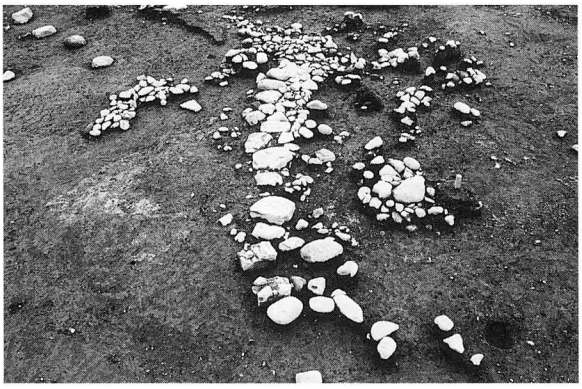


（3）石列3・池状遺構（南東より）



（4）池状遺構　石列3

（5）池状遺構　石列3



（6）池状遺構　石列3（北西より）

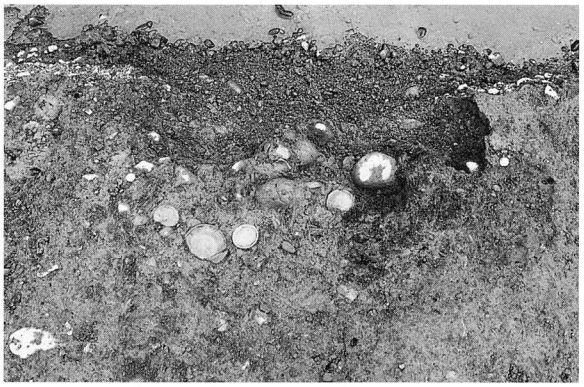
（7）池状遺構　石列3（北東より）

（8）池状遺構　石列3　カワラケ溜21（南西より）

図版6

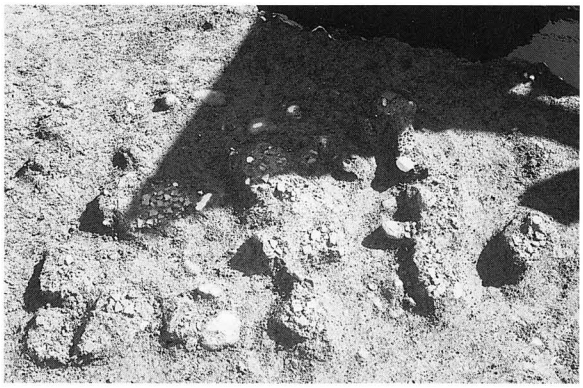
（1）溝（北東より）

（2）溝（南東より）



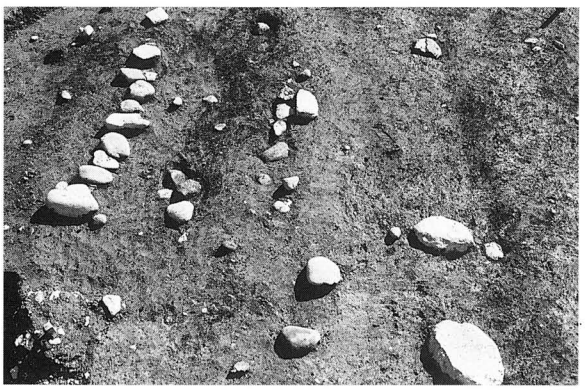
（3）1号土抗（北西より）

（4）1号土抗（南東より）

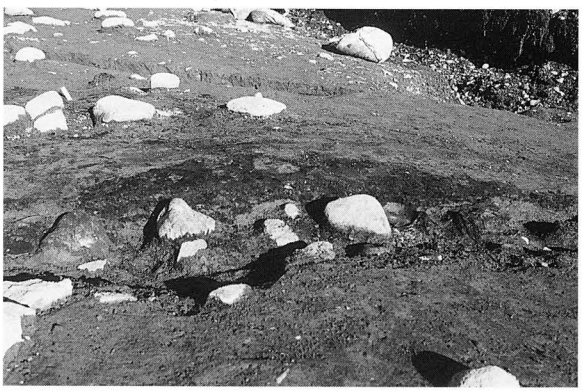


（5）カワラケ溜り1（南西より）

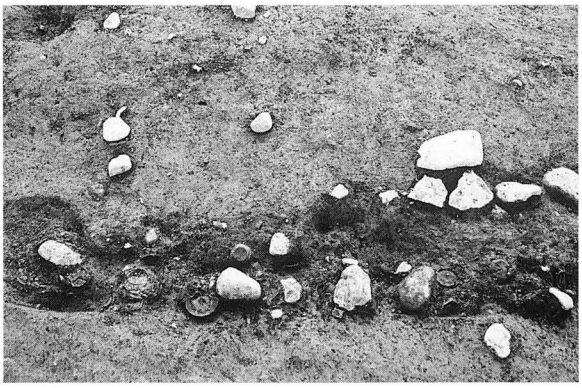
（6）カワラケ溜り1　ほか（南東より）



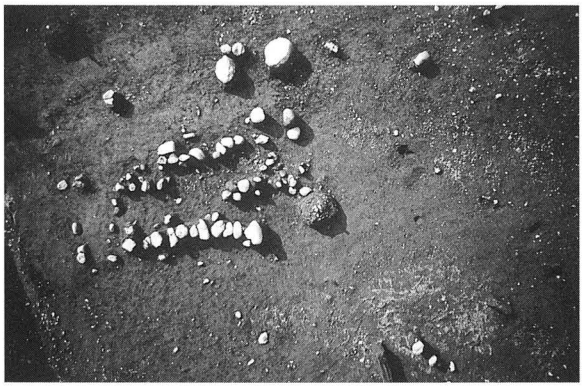
（7）カワラケ溜り1－1　石列2　ほか（南東より）



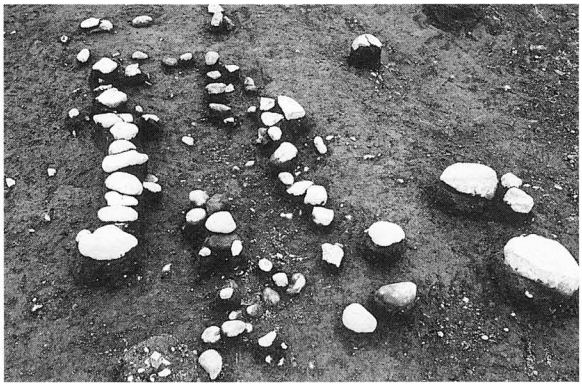
（8）カワラケ溜り1－1（西より）



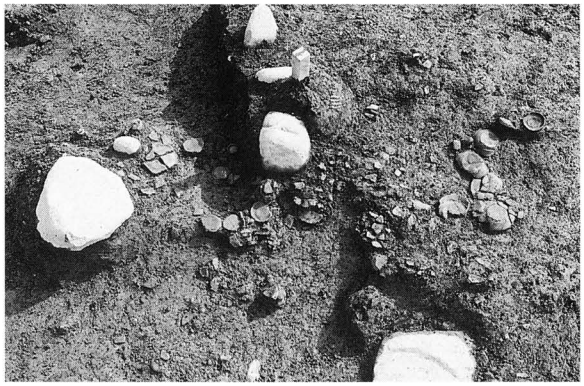
（1）カワラケ溜り１－１（南東より）



（2）カワラケ溜り１－１　ほか



（3）カワラケ溜り１－１　石列２（南西より）



（4）カワラケ溜り23（北西より）

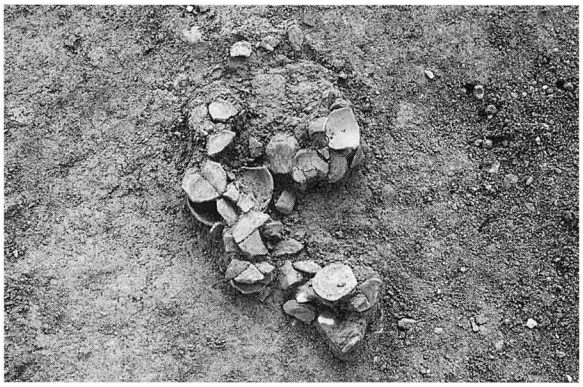
（5）カワラケ溜り23（南西より）

（6）カワラケ溜り23　ほか（南西より）

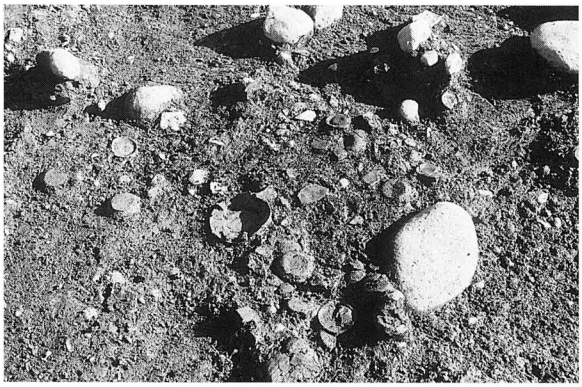
（7）カワラケ溜り23（南西より）

（8）カワラケ溜り23（西より）

図版８



（１）カワラケ溜り 23（北西より）

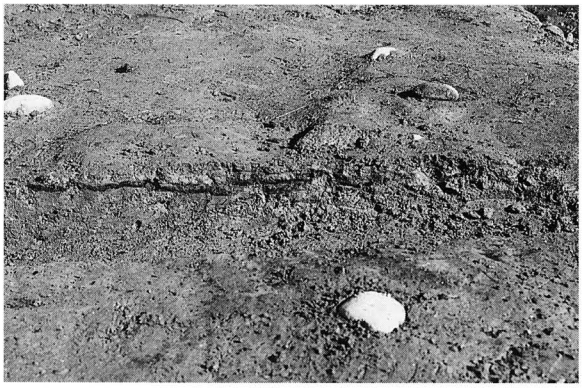


（２）カワラケ溜り 28（北西より）

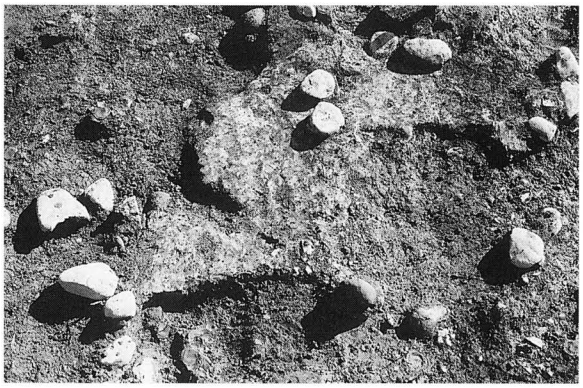
（３）焼土址１・２　貼り床４（北西より）

（４）焼土址１（奥２）（北西より）

（５）焼土址１（南西より）

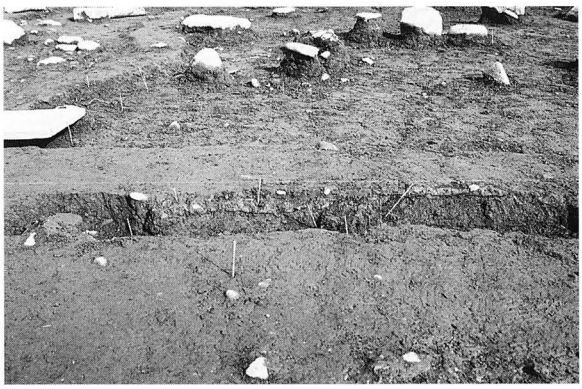


（６）焼土址２（南西より）

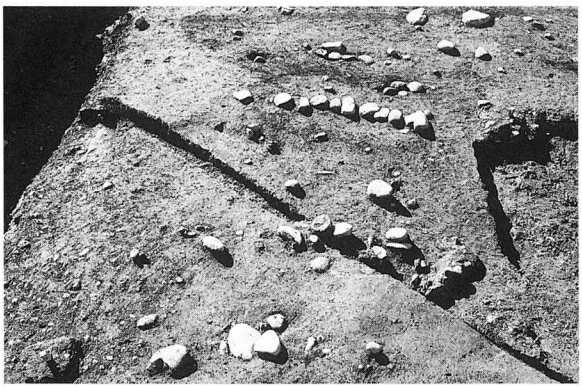


（７）貼り床７（北西より）

（８）貼り床７（南西より）



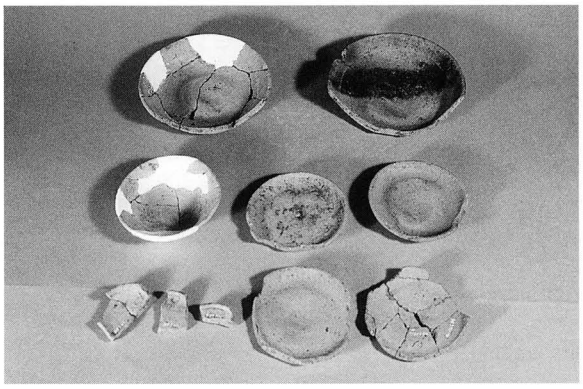
（1）ベルト3（南西より）



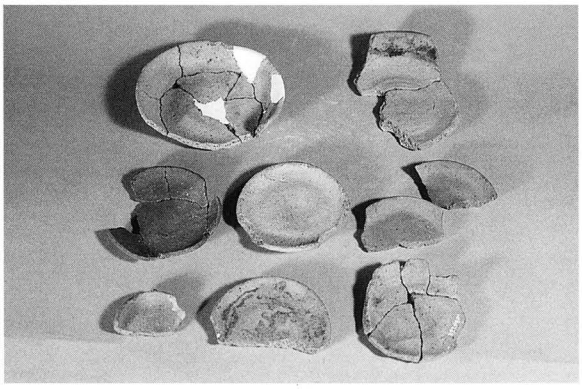
（2）貼り床3・10（北東より）

（3）貼り床10・2（南西より）

（4）集石1（南西より）

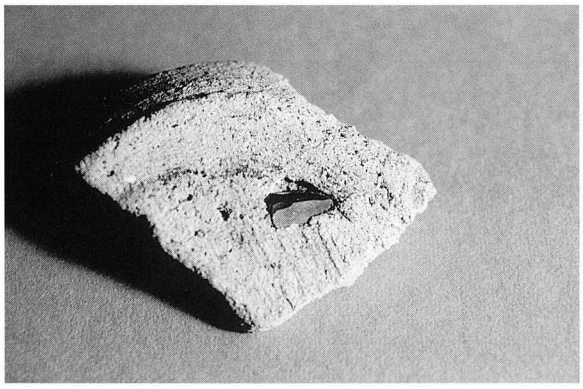


（5）カワラケ溜り1－1　出土カワラケ



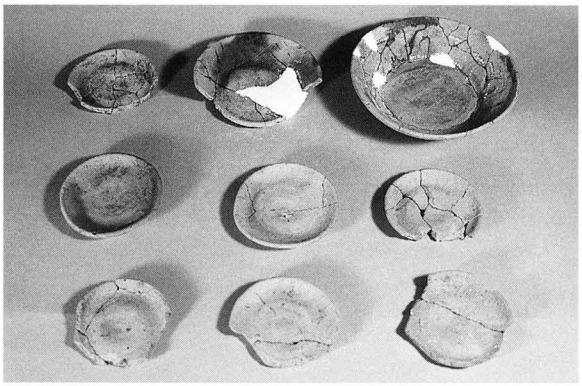
（6）カワラケ溜り21　出土カワラケ

（7）カワラケ溜り23　出土カワラケ



（8）黒曜石を含むカワラケ（カワラケ溜り23）

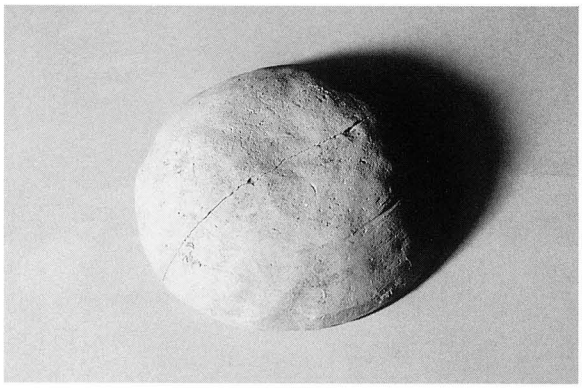
図版10



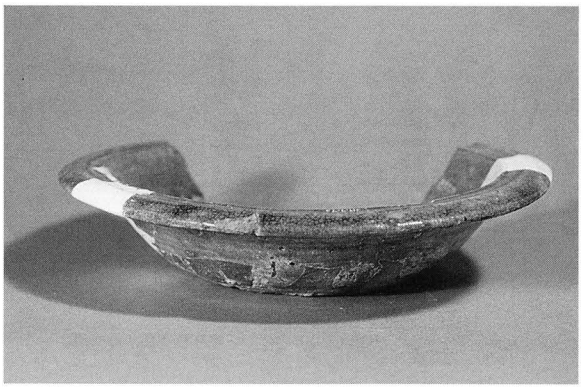
（1）カワラケ溜り28

（2）見込み部に整形痕のあるカワラケ

（3）座部に板状圧痕のあるカワラケ



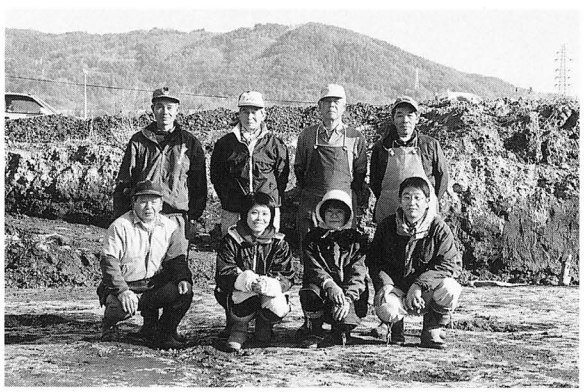
（4）手捏ねカワラケの底部



（5）古瀬戸灰釉折縁深皿

（6）発掘風景

（7）発掘風景



（8）発掘に携った人々

抄　　録

ふりがな	あらたましゃしゅうへん　いせき
書名	荒玉社周辺遺跡Ⅱ
副書名	平成16年度店舗建設工事に伴う緊急発掘調査報告書
編著者名	柳川英司
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL0266-72-2101
発行年月日	西暦2005年3月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あらたましゃ しゅうへん 荒玉社周辺	茅野市 宮川安国寺	20214	319	35° 59′ 21″	138° 08′ 28″	2004.10.05 ～ 2005.01.27	795㎡	店舗建設に 伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒玉社周辺	集落址	中世	礎石建物址　2 溝址・池状遺構 カワラケ溜まり　42 土坑　19 貼り床　11 石列　2 集石　2 焼土址	カワラケ・内耳土器・ 瓦器・瀬戸美濃系陶器 中津川産甕・常滑焼甕 舶載磁器・銭貨	

荒玉社周辺遺跡Ⅱ

――平16年度店舗建設工事に伴う緊急発掘調査報告書――

平成17年３月23日　印刷
平成17年３月25日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番1号
TEL（0266）72−2101
印刷　永明社印刷所
長野県茅野市塚原２丁目12番30号